

フランス語の存在文と探索領域  
－ 意味解釈の文脈依存性と談話モデル －

東郷 雄二 (京都大学)

1. はじめに
2. *il y a* 構文の分類
  - 2.1. 暫定的分類の試み
  - 2.2. 場所句
  - 2.3. 否定
  - 2.4. 定性制約 (definiteness restriction)
3. 談話モデルと Carlson の存在論
  - 3.1. 談話モデル
  - 3.2. Carlson (1977) の存在論
4. 先行研究
  - 4.1. 金水 (1982, 2002, 2006)
  - 4.2. 西山 (1994, 2003)
5. 部分集合文
  - 5.1. 部分集合文の場所句
  - 5.2. 部分集合文の存在レベル
  - 5.3. 部分集合文の探索領域
  - 5.4. 類レベルの存在言明
6. 場所存在文
  - 6.1. 場所存在文の両義的性格
  - 6.2. 初出導入文としての場所存在文
  - 6.3. 眼前描写文
    - 6.3.1. 局面レベルと存在前提
    - 6.3.2. 場所句の問題
    - 6.3.3. 定性制約再考
  - 6.4. 場所存在文の両義性と談話モデルの埋め込み
7. 存在文の本質的両義性
8. おわりに

## 1. はじめに

フランス語で存在を表す非人称動詞には *il y a* と *il existe* があり、ほぼ同じ意味を表すとされている。

- (1) { *Il y a / Il existe* } *des gens qui ne supportent pas le tabac.*

「煙草が我慢ならない人がいる」

ところが Kleiber (1981) は次の例文をあげて、この二つの動詞は統語的に異なる振る舞いを示すことを指摘した。

- (2) a. *Il existe des filles qui parlent le basque.*

「バスク語を話す女性がいる」<sup>1</sup>

b. *Il y a des filles qui parlent le basque.* 「同」

- (3) a. *Il existe des singes qui sont gros.*

「大きなサルがいる」

b. *Il y a des singes qui sont gros.* 「同」

- (4) a. *Il y a des singes qui ont été attrapés hier soir.*

「昨夜捕獲されたサルがいる」

b. *\*Il existe des singes qui ont été attrapés hier soir.* 「同」

- (5) a. *Il y a un livre qui est posé sur la table.*

「テーブルに置かれている本がある」

b. *\*Il existe un livre qui est posé sur la table.* 「同」

(2)と(3)の関係節の述語 *parler le basque / être gros* は恒常的属性を表す述語で、Kleiber は「非特定の述語」(*prédicats non-spécifiants*)と呼んでいる。このときは *il y a* と *il existe* は区別なく用いることができる。ところが(4)と(5)の述語 *être attrapé / être posé* は一時的状態・出来事を表す述語で、Kleiber は「特定の述語」(*prédicats spécifiants*)と呼ぶ。このときは *il y a* のみが適格で、*il existe* は非文となる。

Kleiber の言う非特定の述語は特定の時間・空間に限定されない述語で、Carlson (1977) の個体レベル述語 (*individual-level predicates*) に相当し、特定の述語は特定の時間・空間に限定された存在を述べる述語で、Carlson の局面レベル述語 (*stage-level predicates*) に当たる。以後本稿では Carlson の用語を用いる。Kleiber の眼目は、存在文の実主語名詞句を修飾する関係節の述語の相違に着目し、関係節には 2 種類あることを示すところにあった。とこ

<sup>1</sup> 本当はこの日本語訳は正しくない。「女性の中にはバスク語を話す人がいる」が正しい。(3)も同じである。しかしここで訳のちがいを指摘すると論点の先取りになってしまうので、あえてこの訳を掲げる。

<sup>2</sup> この文もほんとうは「爬虫類の中には単為生殖するものがある」と訳すべきである。

ろが同じ論文で Kleiber は存在文にも 2 種類あるとは述べていない。しかし上の例文が示しているように、il y a 存在文には il existe と交換可能なもの (2) (3) とそうでないもの (4) (5) がある。本稿の目標の第一は、日本語の存在文との比較を通じてこの 2 つのタイプの存在文の意味特性を検討することにある。

存在文は「何かの存在」を述べる文である。存在するものは必ず「どこかに」存在する。だから存在文には「存在場所」が必ずあるはずだ。しかし次の例文はどうだろうか。

(6) a. Il y a quelqu'un qui n'est pas là.

「ここにいない人がいる」

b. Il y a deux clefs qui ont disparu.

「なくなった鍵が二つある」

c. Il y a trois élèves qui sont absents aujourd'hui.

「今日欠席している生徒が三人いる」

(6) a. は「ここにいない人」、(6) b. は「なくなった鍵」、(6) c. は「欠席している生徒」の存在を述べている。いずれも「ないものがある」「いない人がいる」という一見矛盾する言明である。本稿が提起する疑問のひとつは、これらの文が矛盾文とならないのはなぜかという点である。同じ現象は日本語にも観察できる。

(7) a. この海域には地震で消滅してしまった島がいくつもある。

b. 19 世紀に絶滅した動物種がたくさんある。

もうひとつの疑問は、「ないものが存在する存在場所」はどこかという点である。「ないものが存在する場所」とは、表現自体が矛盾撞着しているように見える。しかし存在するものは必ずどこかに存在するはずで、矛盾するよう見える存在文にも存在場所があるはずである。本稿の目標の第二は、存在文における「存在場所」という概念を再検討することである。

存在文に付随する場所の状況補語があるとき、存在場所はその状況補語が表す場所だと考えられるかもしれない。例えば次の例の *sur la table* がそれである。

(8) Il y a des assiettes sur la table. 「テーブルの上に皿がある」

場所を表す状況補語を以下では「場所句」(locatifs)と呼ぶ。(8)の場所句 *sur la table* は名詞句 *des assiettes* の存在場所なのだろうか。確かに皿はテーブルの上にあるのだから、テーブルが皿の存在場所であることは自明のように見える。

しかし本稿では、存在文の意味解釈にとって本当に重要な「存在場所」は場所句が表す場所ではなく、存在文全体が意味解釈される解釈領域であることを示す。その解釈領域とは(8)の命題全体が成り立つ領域、たとえば発話の場や話し手の視野の領域であり、本稿では以後これを「探索領域」と呼ぶ。(8)のように探索領域は明示的に表現されていないことが多い。これは文の意味解釈における文脈依存性の問題のひとつである。本稿の第三の目標は、存在文の意味解釈を通じて談話の理解における文脈依存性の一面を考察することにある。

## 2. il y a 構文の分類

### 2.1. 暫定的分類の試み

本稿では上の(2)(3)と(4)(5)のタイプの存在文を中心に考察するが、il y a 構文はこれに尽きるものではない。英語では there 構文について Lakoff (1987) が示した分類が最も詳細なものだが、フランス語の il y a 構文についてはめぼしい分類が見あたらない。本稿では暫定的に次の分類に基づいて考察を進めることにする。

#### (9) il y a 構文の分類

##### a. 部分集合文

Il y a des reptiles qui sont parthénogénétiques.

「単位生殖する爬虫類がいる<sup>2</sup>」

##### b. 場所存在文

Il y a de gros singes dans ce zoo.

「この動物園には大きなサルがいる」

##### c. 出来事文

Qu'y a-t-il donc ? — Il y a que j'étouffe. (朝倉 1981)

「いったいどうしたんですか」「喉がつまったんです」

Il y a grève aujourd'hui.

「今日ストがある」

##### d. 擬似関係節を伴う存在文

Je voudrais me marier, mais il y a ma mère qui m'en empêche.

「結婚したいのだが、母が反対するんだ」

##### e. リスト存在文 (cf. Rando & Napoli 1978)

Qu'est-ce qu'il y a à voir dans cette ville ? — Eh bien, il y a le Jardin botanique et la cathédrale.

「この町で見るべきものは何ですか」「ええと、植物園と大聖堂です」

---

<sup>2</sup> この文もほんとうは「爬虫類の中には単為生殖するものがある」と訳すべきである。

f. 眼前描写存在文

Regarde ! Il y a Jean qui est en train de draguer une fille !

「見ろよ。ジャンが女の子をナンパしてるよ」

以下ではこの分類の根拠となる統語的・意味的振る舞いの違いを見ることにする。

2.2. 場所句

a.~f. は場所句を付加できるか否かに関して異なる振る舞いを見せる。

(10) a. 部分集合文

Il y a un amour éternel { \*en France / \*dans ce pays } .

「{\*フランスには / \*この国には } 永遠の愛がある」

b. 場所存在文

Il y a beaucoup de cerisiers dans ce parc.

「この公園にはサクラの木がたくさんある」

c. 出来事文

Il y a qu'un livre a été volé dans cette bibliothèque.

「この図書館で本が盗まれました」

d. 擬似関係節を伴う存在文

Il y a Paul qui se marie { dans cette église / \*sur le trottoir } .

「ポールが{この教会で / \*舗道で} 結婚式をあげるんだ」

e. リスト存在文

Qui y a-t-il d'autres à inviter ? — \*Il y a M.Vincent dans le jardin.

「他に招待する人は誰ですか」「\*庭にヴァンサンさんがいます」

f. 眼前描写存在文

Regarde ! Il y a des agents de police devant ta maison !

「見ろよ。君の家の前にパトカーがいるよ」

場所存在文は対象の空間的存在を述べる文なので、問題なく場所句を付加できるが、他のタイプにはそれぞれ固有の問題がある。

まず部分集合文に場所句を付加することは一般に難しい。しかし次のような例を考えることができる。

(11) a. Il y a des reptiles qui sont parthénogénétiques en France.

「フランスには単為生殖する爬虫類がいる」

b. Il y a trois élèves qui sont absents dans cette classe.

「このクラスには欠席している生徒が三人いる」

これについては部分集合文の意味論と併せて後に詳しく検討する。

出来事文の場所句 *dans cette bibliothèque* 「この図書館で」は *il y a* ではなく、*que* 節の中の *un livre a été volé* 「本が盗まれた」を修飾する状況補語である。図式的には a. でなく b. である

(12) a. × Il y a que [un livre a été volé ] dans cette bibliothèque

b. ○ Il y a que [ un livre a été volé dans cette bibliothèque ]

つまり、「[本が盗まれるという事件]が図書館で起きた」のではなく、「[図書館で本が盗まれるという事件]が起きた」のである。したがってこの場所句は *il y a* 構文の場所句ではない。一般に、出来事 *il y a* 文に場所句を付加することはできないと思われるが、この点は本稿の扱う問題と直接関係しないので、考察はここまでに留める。

同じことは擬似関係節についても言える。d. で *dans cette église* 「この教会で」が修飾しているのは擬似関係節内の *se marier* 「結婚する」であり、「結婚する Paul が教会にいる」のではない。文脈を与えてみよう。

(13) A : Qu'est-ce qu'il y a ? Les Dupont sont tous endimanchés.

「いったい何があるんだい。デュポン家の人たちはみんな晴れ着姿だよ」

B : Il y a Paul qui se marie dans cette église.

「ポールがこの教会で結婚するんだよ」

場所句を *sur le trottoir* 「舗道で」に置き換えたとき、もし「これから結婚するポールが今たまたま舗道にいる」という解釈ならば意味的に問題ないはずである。しかし実際はそうではなく、文は意味的におかしなものになる。ふつう舗道で結婚式はしないからである。したがって *dans cette église* 「この教会で」は *il y a* の場所句ではなく、*qui* で始まる関係節内で働く句と見なすべきである。

リスト存在文にも場所句は付加できない。次のリスト存在文は可能だが、[*ma voiture dans le garage*] 「ガレージの中の私の車」がひとつの名詞句を形成し、*dans le garage* 「ガレージの中で」は *il y a* の場所句ではない。

(14) Comment peut-on aller au village ? — Il y a [<sub>NP</sub> ma voiture dans le garage ].

「村までどうやっていけばいいんだ」「ガレージに僕の車があるよ」<sup>3</sup>

眼前描写文には場所存在文と同じく場所句を付加することができる。しかし上に述べたように、眼前描写文の場所句もまた、存在文の意味解釈にとって真に関与的な探索領域ではない。この点については後述する。

### 2.3. 否定

次にこれらのさまざまな *il y a* 構文は否定に対して異なる振る舞いをする。否定が自由にできるのは部分集合文と場所存在文だけで、他は否定が難しいか不可能である。

#### (15) a. 部分集合文

*Il n'y a pas de reptiles qui sont parthénogénétiques.*

「単為生殖する爬虫類はいない」

#### b. 場所存在文

*Il n'y a pas de gros singes dans ce zoo.*

「この動物園には大きなサルはいない」

#### c. 出来事文

?? *Il n'y a pas que j'étouffe.*

「??私は息が詰まっていない」

#### d. 擬似関係節

\**Il n'y a pas Marie qui arrive.*

「\*マリーが来ない」

#### e. リスト存在文

\**Il n'y a pas le Jardin botanique et la cathédrale.*

「\*植物園と大聖堂がない」

#### f. 眼前描写文

*Regarde ! \*Il n'y a pas le Président devant ta maison !*

「見て。\*君の家の前に大統領がいない」

*il y a* 存在文と否定の関係もまた本稿の主眼ではないので考察は省略するが、かんたんに触れておくと、出来事文・擬似関係節・眼前描写文は基本的に出来事の生起を述べる現象文なので、本来否定とは相性が悪い。またリスト存在文は条件を満たす項目を列挙するのがその機能であるため、否定を許容しない。

---

<sup>3</sup> 本当は「ガレージの僕の車があるよ」の方が意味的に正しい訳だが、日本語としてはやや不自然なので採用しなかった。

## 2.4. 定性制約 (definiteness restriction)

次に実主語の定性制約についても異なる振る舞いを示す。部分集合文と場所存在文には定性制約があり、残りのタイプは定性制約に従わない。

### (16) a. 部分集合文

\*Il y a les reptiles qui sont parthénogénétiques.

「\*単為生殖する(その)爬虫類はいない」

### b. 場所存在文

\*Il y a les pandas dans ce zoo.

「\*この動物園に(その)パンダはいない」

### c. 出来事文 (該当せず)

### d. 擬似関係節

Il y a mon père qui est malade.

「父が病気なんだ」

### e. リスト存在文

Il y a le Jardin botanique et la cathédrale.

「植物園と大聖堂がある」

### f. 眼前描写文

Regarde ! Il y a le Père Noël !

「見て。サンタクロースがいるよ」

## 3. 談話モデルと Carlson の存在論

ここで以下の分析のために必要な枠組みを導入する。

### 3.1. 談話モデル

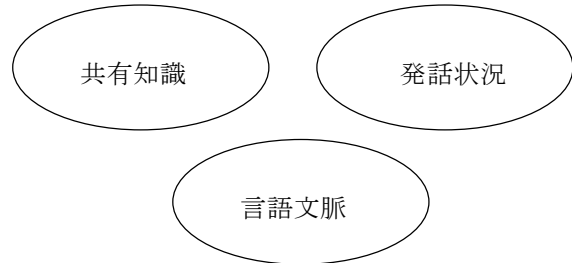
東郷は、東郷 (1998, 1999, 2000, 2001, 2002) において、主として名詞句・代名詞などの意味解釈のためのモデルとして談話モデル理論を提案した。談話モデル理論とは、Fauconnier のメンタル・スペース理論に立脚する心的スペースを基礎とするものである。Fauconnier の理論との大きな違いは、i) 共有知識領域・発話状況領域・言語文脈領域という3種類の心的スペースを仮定する点、ii) 話し手側の聞き手側の両方に談話モデルを立て、談話を話し手のモデルと聞き手のモデルの調整作業とみなす点の2点である。

談話モデルは以下の3つの下位領域から成る。

### (17) 談話モデル Discourse Model



- a. 共有知識領域 Shared Knowledge
  - a-1. 百科事典的知識領域 Encyclopaedic Knowledge
  - a-2. エピソード記憶領域 Episodic Memory
- b. 発話状況領域 Context of Use
- c. 言語文脈領域 Linguistic Context



まず共有知識領域は、さらに百科事典的知識領域とエピソード記憶領域という 2 種類の下位領域を持つ。百科事典的知識領域には談話の開始前から私たちが一般的に知っている

と見なされる世界についての知識に関する談話指示子 (discourse referent) が格納されている。次例の Columbus や America のような固有名、the earth や the sun などの唯一物がこれに該当する。これらの談話指示子は共有知識領域において存在前提を持つため、いきなり談話に持ち出すことができる。エピソード記憶領域はより個人的な記憶領域で、話し手の体験などに基づく個人的知識が格納されている。次例の話し手と聞き手の共通の友人 Paul などがこれに当たる。

(18) 共有知識領域

- a. 百科事典的知識領域 Encyclopaedic knowledge
  - Columbus discovered America in 1492. [ 固有名 ]
  - The earth goes round the sun. [ 唯一物 ]
- b. エピソード記憶領域
  - Have you heard of Paul recently ?

発話状況領域はいわゆる発話の場で、デフォルトで話し手と聞き手、および発話の場に存在する事物が登録されている。次例の現場指示的指示詞 that などはこの領域で解釈される。

(19) 発話状況領域

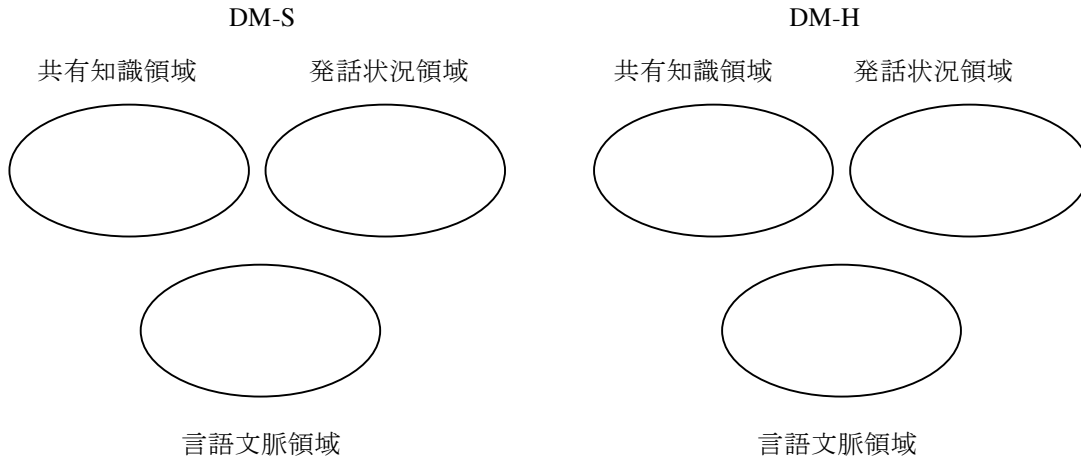
[指さしながら] Pass me that hammer.

言語文脈領域は談話開始時の初期値がゼロであり、談話の進行に伴って言語情報が入力され蓄積される領域である。次例では不定名詞句 a boy によってこれに相当する談話指示子が言語文脈領域に登録され、照応的代名詞 he はその談話指示子を指す。

(20) 言語文脈領域

A boy came in. He sat down.

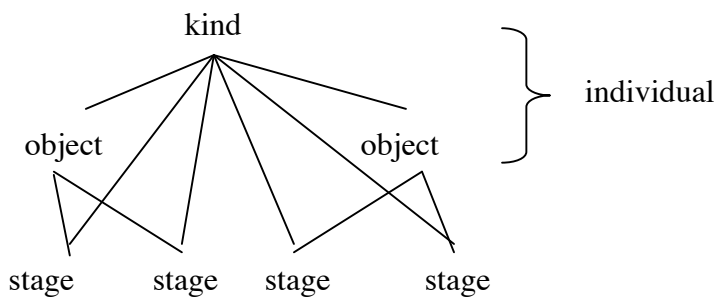
談話モデルは話し手と聞き手の両方の側に設定される。一般的形式は次の図のように表示する。DM-Sは話し手側のモデル、DM-Hは聞き手側のモデルを意味する。



3.2. Carlson (1977) の存在論

本稿では Carlson (1977) の存在論に立脚する。Carlson は事物の存在レベルを kind (類)、object (個体)、stage (局面) の 3 種類に分けた。このうち kind と object は individual としての性質を持ち、stage と対立する。

(21) kind (類) / object (個体) / stage (局面)



kind / object / stage の関係は次の論理式で定義されている。ただし、R(A, B)は上位レベルの B から下位レベルの A を切り出す実現関数 (realization function) とされる。

$$\forall y^k \square \forall x^s [ R(x^s, y^k) \rightarrow \exists z^o [ R'(z^o, y^k) \wedge R(x^s, z^o) ] ]$$

kind は「スピッツ」「トマト」「鉄」など、この世に存在する事物の類概念を表す。kind

は時間・空間に束縛されず存在する対象である。object は例えば我が家で飼っているスピッツの「ポチ」や、友人の山田さんのような個体を表す。object は時間的に恒常的に存在するが、空間には束縛される。kind と object は時間的に安定した存在であるという点で、individual とされる。stage は kind や object の時間的切片であり、空間的に束縛され、また時間的にも短時間しか存在しないものとされる。わかりやすいようにこしらえたエピソードで説明しよう。

「西表島で未知の哺乳類の目撃情報が相次いだ。調査隊は出沒地点に赤外線カメラを設置した。やがてネコに似た動物の赤外線写真が一枚撮影された。この動物は新種の哺乳類と認定され、『イリオモテヤマネコ』と命名された。」

写真に写ったネコに似た動物は、瞬間的映像だから stage レベルの存在である。写真に写ったからには、写った個体が存在する。これは object レベルの存在である。個体が存在するからには、新しい動物種がいるにちがいないと推測される。調査の結果、「イリオモテヤマネコ」と命名され新種が kind レベルの存在ということになる。

Carlson は kind / object / stage は言語的には次のように表現されるとしている。

- (22) a. *Dogs are intelligent.* [kind]  
c. *Italians smoke.* [kind]  
b. *John is tall.* [object]  
d. *A dog is barking.* [stage]  
f. *Four ducks were on the pond.* [stage]  
g. *John is smoking.* [stage]

本稿の提案する談話モデルと Carlson の存在論の間には、次のような関係が成り立つ。

- (23) 談話モデルと Carlson の存在論の対応関係  
a. individual (kind, object)は共有知識領域に登録される。  
b. stage は発話状況領域に登録される。  
c. 言語文脈領域には kind / object / stage のすべてが登録される。

#### 4. 先行研究

##### 4.1. 金水 (1982, 2002, 2006)

金水 (1982, 2002, 2006)は日本語の存在文全般について詳しい考察を展開している。ここでは金水 (1982)と金水 (2002)をまとめて紹介する。金水はまず存在表現を、限量的存在文

と空間的存在文とに大きく分ける。

(24) 金水 (1982, 2002)の存在表現の分類

(A) 存在 I [限量的存在文]

聞き手にとって未知の人物を話し手が物語世界に初めて持ち出す表現である。(…)  
どこに存在するかという情報は必ずしも重要ではなく、(…) 場所情報を欠くものもある。  
時間を捨象した状態性判断である。抽象性・観念性の強いタイプの文である。

ex. 授業中に寝ている学生がいる。

$\exists x [ \text{学生}(x) \wedge \text{授業中に寝ている}(x) ]$

(B) 存在 II [空間的存在文]

既知の人物が (その時点で) どこに存在するかという表現であり、場所情報は必須。  
同じ状態性であっても、持続する時間の幅を意味として含んでいるという点で、存在 I  
とは異なる。具体性・実体性の強い、動作・行為文にも似たタイプ。

ex. 子供が公園にいる

$\text{いる}(x) [ \text{子供}(x) \wedge \text{公園}(x) ]$

金水はこのように特徴づけた限量的存在文と空間的存在文を、さらに次のように細かく分類している。

(25) 限量的存在文

a. 部分集合文

ex. (最近の日本は) 教科書以外の本は一冊も読まない学生がいる。

b. 初出導入文

ex. 昔、ある山奥の村に、太郎という男の子がいた。

c. 擬似限量的存在文

ex. 昔、太郎という男の子がある山奥の村にいた。

d. 所有文

ex. 私には婚約者がいる。

e. リスト存在文

ex. 当時のパンの会のメンバーには、北原白秋、高村光太郎、木下杢太郎、吉井勇  
らがいた。

(26) 空間的存在文

a. 所在文

ex. お父さんは会社にいる。

b. 眼前描写文

ex. あ、子供がいる。

金水の分類のうち、所有文はフランス語では存在表現としてではなく所有表現として表れるのでここでは関係しない。また初出導入文と擬似限量的存在文は語順の違いによる微細な区分であり、ここでは考慮しない。リスト存在文も考察の対象から除外する。すると残るは限量的存在文では部分集合文と初出導入文ということになる。

空間的存在文のうち、所在文はフランス語では **Mon père est au bureau.** となり、**il y a** 存在文の形を取らないので考察から省く。

問題は眼前描写文である。金水は空間的存在文の性質を「既知の人物が (その時点で) どこに存在するかという表現」としている。所在文についてはこれは正しいのだが、眼前描写文では問題がある。金水のあげる例「あ、子供がいる」はフランス語では **Tiens, il y a un enfant / des enfants.** となり、「子供」は不定名詞句になる。不定名詞句は未知の対象を表し既知の対象を表さない。したがって、金水の「既知の人物が (その時点で) どこに存在するかという表現」という規定は眼前描写文には適切でない。

さらに問題がある。次も眼前描写の存在文である。

(27) **Regarde ! Il y a Stephane qui est en train de draguer une fille !**

「見てみろ。ステファンが女の子をナンパしてるぞ」

(28) 見て、五百旗頭さんがあんなところにいるよ。

フランス語の **Stephane**、日本語の五百旗頭さんは明らかに話し手にとっても聞き手にとっても既知の人物である。**il y a** 存在文にはふつう定性制約があるとされていて、実主語は不定のものに限られ、定のあるものは置くことができない。しかし既に述べたように眼前描写の存在文ではこの制約が解除される。この問題については後に詳しく触れる。

#### 4.2. 西山 (1994, 2003)

次に西山 (1994) は存在文を次のように分類している。

(29) 存在文の分類 I : 場所表現を伴うタイプ

- a. 場所・存在文 机の上にバナナがある
- b. 所在文 おかあさんは、台所にいる
- c. 所在コピュラ文 おかあさんは、台所です
- d. 指定所在文 その部屋にだれかいるの。…洋子がいるよ。
- e. 存現文 おや、あんなところにリスがいるよ

(30) 存在文の分類 II: 場所表現を伴わないタイプ

- a. 実在文                   ペガサスは存在しない
- b. 絶対存在文            太郎の好きな食べ物がある
- c. 所有文                   山田先生には借金がある
- d. 準所有文               フランスには国王がいる
- e. リスト存在文        甲：母の世話をする人はいないよ。  
                              乙：洋子と佐知子がいるじゃないか。

I. のうち、所在文と所在コピュラ文はフランス語では *il y a* 構文にはならないのでここでは関係しない。指定所在文は場所存在文の変種と見なせる。II. のうち実在文と所有文と準所有文はフランス語では *il y a* 構文の形を取らず、またリスト存在文も考察から外す。

本稿の考察に関係する金水と西山の存在文の分類をもう一度まとめてみよう。

(31) 金水

I. 限量的存在文

- a. 部分集合文  
    ex. (最近の日本は) 教科書以外の本は一冊も読まない学生がいる。
- b. 初出導入文  
    ex. 昔、ある山奥の村に、太郎という男の子がいた。

II. 空間的存在文

- b. 眼前描写文  
    ex. あ、子供がいる。

(32) 西山

I. 場所表現を伴う

- a. 場所・存在文        机の上にバナナがある
- e. 存現文                おや、あんなところにリスがいるよ

II. 場所表現を伴わない

- b. 絶対存在文        太郎の好きな食べ物がある

金水の眼前描写文は西山の存現文に対応する。後に述べるように、金水の部分集合文は西山の絶対存在文に対応する。両者の分類が食い違うのは、金水の「初出導入文」と西山の「場所・存在文」である。西山のあげる「机の上にバナナがある」はフランス語では *Il y a des bananes sur la table.* となり、最も一般的な存在文のタイプだと見なすことができるが、金水の分類にはこれに相当するものがない。一方、金水の分類の初出導入文「昔、ある山

奥の村に、太郎という男の子がいた」は、物語の冒頭で登場人物を談話に導入するタイプの文だが、西山にはこれに相当するものがない。この食い違いはどのように説明できるだろうか。以下に詳しく考察する。

## 5. 部分集合文

### 5.1. 部分集合文の場所句

まず部分集合文の問題点を見て行く。金水は部分集合文について次のように述べている。

#### (33) 部分集合文の特徴 (金水 2002)

- a. 名詞に関係節をつけて部分集合を設定し、その元の有無を述べる。
- b. 場所句を付けることは難しいが、付けることもできる。このとき場所句は部分集合の元の有無を判断する領域を指定する。これを「世界設定語」と呼ぶ。
- c. 次の式で表すことができる。ただし、「 $\forall w$  最近の日本」は、表現にたいして「 $w$  最近の日本」という可能世界の外延を与える関数。

$$\forall w \text{ 最近の日本 } [\exists x [\text{教科書以外の本は一冊も読まない}(x) \wedge \text{学生}(x)]] = \text{TRUE}$$

一方西山は、部分集合文（西山の用語では絶対存在文）には場所句を付けることが難しく、付けるとすれば「この世のなかに」が考えられるが、これは場所を表すものではないとして次のように述べている。

#### (34) 絶対存在文

- a. 米の嫌いな人がいる。
- b. この世のなかには、米の嫌いな人がいる。

『この世のなかには』は対象が位置する空間的場所を表す表現ではないことに注意すべきである。この表現は、『この世に住んでいる人々のなかには』あるいはより厳密には『この世界を構成するメンバーのなかには』という意味であって、場所を表す空間的表現ではない。それは変項  $x$  の走る範囲を述べているのである。」(西山 2003 : 406)

同種の存在文について古川 (1996) は次のように述べている。

#### (35) Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.

(アメリカ人の中にはオペラ好きな人が多い)

「上に見た関係節の振る舞いを決定しているのは、あらゆる存在文に論理的に措定しうる localisateur である。表題の文における localisateur は、対応する日本語文『アメリカ

人にはオペラ好きが多い』における『アメリカ人 (には)』に相当する。『アメリカ人 (には)』は、アメリカ人一般の集合である。アメリカ人一般の集合という観念的な場所にオペラ好きなアメリカ人の大きな部分集合が存在する、ということである。」(古川 1996 : 35)

金水は部分集合文の場所句を「部分集合の元の有無を判断する領域」とし、西山は「変項  $x$  の走る範囲」と主張している。変項  $x$  の走る範囲ならば、それは  $x$  の母集合を表しているはずである。一方、古川は名詞句 (les) Américains が観念的な場所句の役割を果たしているとしており、三者の言うことは似ていながら微妙に食い違っている。どの主張が妥当かをテストするために、次の例文を考えてみよう。

(36) a. Il y a trois élèves qui sont absents aujourd’hui.

「今日欠席している生徒が三人いる」

b. Il y a deux clefs qui ont disparu

「なくなった鍵が二本ある」

a. はこのクラスの生徒 (例えば 40 人)のうち欠席者が 3 人いることを述べており、確かに部分集合文である。b. の解釈としては、例えばこの家の鍵は全部で 6 本あるはずなのに、2 本どこかへ行ってしまったというものが考えられる。a. には「この教室に」 dans cette classe という場所句が想定できるが、それは物理的空間としての教室ではない。もしそうだとすると、欠席している生徒がこの教室の中に座っているという意味になり矛盾する。また b.には場所句を付けることが難しい。

(37) a. Dans cette classe, il y a trois élèves qui sont absents aujourd’hui.

「このクラスには今日欠席している生徒が三人いる」

b. ??Dans cette maison, il y a deux clefs qui ont disparu.

「??この家にはなくなった鍵が二本ある」

この場合、「この教室に」 dans cette classe は「このクラスの生徒のなかに」 parmi les élèves de cette classe という意味である。また b. では「この家の鍵のなかに」 parmi les clefs de cette maison がこれに相当する。

(38) a. Parmi les élèves de cette classe, il y en a trois qui sont absents aujourd’hui.

「このクラスの生徒のなかには、今日欠席している人が三人いる」

b. Parmi les clefs de cette maison, il y en a deux qui ont disparu.



「この家の鍵のなかには、なくなったものが二本ある」

もしそうだとすると、部分集合の元となる母集合「生徒たち」 (les) élèves は、総称的な「全世界の生徒」ではなく、「この学校の生徒」でもなく、「この学級の生徒」に制限されており、場所句 dans cette classe は「生徒」の集合を限定していることになる。

ここで部分集合文を三分構造 (tripartite structure)を用いて次のように書くことにしよう<sup>4</sup>。

(39) 部分集合文の三分構造表記

Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.

「アメリカ人の中にはオペラ好きな人が多い」

beaucoup (x) [ Américains (x) ] [aimer-l'opéra (x) ]

三分構造の一般型は Quantifier [ Restrictor ] [ Nuclear Scope ]と書くことができる。Restrictor (制限節)は、Quantifier (量化詞)が走る母集合の領域を表し、Nuclear Scope (核作用域)は文の述語が成り立つ領域を表す<sup>5</sup>。上の例の b. では、Américains の集合を母集合とし (変数 x が走る領域)、そのうち aimer-l'opéra を満たす x の割合が beaucoup であることを意味する。

すると部分集合文は次のように書くことができる<sup>6</sup>。

(40) a. Il y a trois élèves qui sont absents.

「欠席している生徒が三人いる」

$\exists x [ \text{élève} (x) ] [ \text{être-absent} (x) \wedge \|x\| = 3 ]$

b. Dans cette classe, il y a trois élèves qui sont absents.

「このクラスには欠席している生徒が三人いる」

$\exists x [ \text{élève} (x) \wedge x \in \text{cette classe} ] [ \text{être-absent} (x) \wedge \|x\| = 3 ]$

ただし、a.では制限節の「生徒」 élève に限定がないので、このままでは世界中の生徒を意味することになるが、ふつうこのような場合は、生徒の集合は文脈的または語用論的に限定を受ける。a. が朝のホームルームでの担任教師の発話なら、「このクラスの生徒」を母集合としているとみなすことができる。この母集合を明示的に表現したものが b.である。b.の制限節 [ élève (x)  $\wedge$  x  $\in$  cette classe ] は「このクラスの生徒」を表しており、文頭の場所句 dans cette classe は制限節に繰り込まれていることがわかる。ここから次の仮説を

<sup>4</sup> 三分構造表記の詳細については Heim (1982), Hajicová et al. (1998)を参照。

<sup>5</sup> ほんとうは制限節と核作用域の中身は集合なので、ラムダ変換( $\lambda$  conversion)が必要だがここでは簡略表記に留める。

<sup>6</sup> 式の中の  $\|x\| = 3$  は、x の外延の数が 3 であることを表す。

導くことができる。(34)の西山の規定とほぼ同じものである。

#### ◆仮説 (1) ◆

部分集合文の場所句は空間的な存在場所を表すのではなく、制限節に繰り込まれて変項  $x$  の走る母集合を制限する限量化の機能を持つ。

こう考えることによって、本稿の冒頭で提示した疑問の一つに解答することが可能になる。その疑問とは、「欠席している生徒が3人いる」 *Il y a trois élèves qui sont absents.* において、「ここにいない生徒がいる」という言明がどうして矛盾文にならないかというものである。

ここで重要な役割を果たすのが「解釈領域」という概念である。「ここにいない」と「いる」は異なる解釈領域を持つ。上に示した三分構造で明らかのように、「ここにいない」は核作用域で成り立ち、「いる」は制限節で成り立つ。「ここにいない」は現実の教室という場面で解釈され、「いる」は「この学級の生徒の集合」において解釈される。言い換えれば、この学級の生徒の集合のなかには、本日欠席している元の数がゼロではないということはこの文は述べているのである。「いる」と「いない」の解釈領域が異なるため、この文は矛盾文にはならないと考えることができる。

金水の説明もこれと大きく異なるものではない。金水は部分集合文の場所句を「世界設定語」と呼んだが、これは本稿で上に三分構造の論理式で示したものと同一ことを、メンタル・スペース的発想によって表現したものと捉えることができる。

ここで仮説 (1) の系として、次の仮説を提案しておく。

#### ◆仮説 (2) ◆

部分集合文に場所句がないときは、次のどちらかの手順によって制限節が構築される。

- i) デフォルトで制限節は最大領域で解釈される。
- ii) 先行文脈などにより談話的に制限を受けた集合が制限節の内容となる。

i) は次のようなケースである。

(41) a. *Il y a des reptiles qui sont parthénogénétiques.*

「爬虫類の中には単為生殖するものがある」

b. *Il y a des vérités qui ne se disent pas.*

「口に出してはいけない真理というものがある」

c. 米の嫌いな人がいる。(西山 2003)

最大領域で解釈されると、制限節は「この世には」となり、最も一般的で総称的な意味の文となる<sup>7</sup>。

ii)の手順を踏むのは次のような場合である。

(42) [フランス語が下手なので学生パーティーに行くのを渋っている人に]

Ne t'en fais pas. Il y aura des étudiants qui parlent japonais.

「心配しなくていいよ。日本語を話す学生がいるから」

$\exists x [ \text{étudiant} (x) \wedge \text{être-à-la-fête} (x) ] [ \text{parler-japonais} (x) ]$

ここでは先行文脈の話題「学生パーティーを開く」から「パーティーに来る学生」の集合が導出されて制限節に繰り込まれる。

## 5.2. 部分集合文の存在レベル

次に部分集合文に登場する事物の存在レベルを考えてみよう。

- (43) a. Il y a des reptiles qui sont parthénogénétiques. [sub-kind]  
「爬虫類の中には単為生殖するものがある」
- b. Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra. [object]  
「アメリカ人の中にはオペラ好きな人が多い」
- c. Il y a deux clefs qui ont disparu. [object]  
「なくなった鍵が二本ある」
- d. Il y a trois élèves qui sont absents aujourd'hui. [object]  
「今日欠席している生徒が三人いる」

a.では下位類 (sub-kind)で、b.と c.と d.では個体(object)である。部分集合文は、母集合の中で関係節の述語が成り立つ元の有無や数の多寡を述べる文なので、存在を述べる事物は下位類か個体に限られる。その理由は、集合を形成するのは類 (kind)・下位類 (sub-kind)・個体 (object)のみだからである。集合の元として認識されるためには、その要素は時間的に安定した存在でなくてはならない。局面 (stage)は特定の場所と時間においてのみ認識される存在であり、時間的に不安定であるため集合を形成することができず、このため部分集合文に現れることはできない。

これを次の仮説として提案しよう。

---

<sup>7</sup> ただし西山の「米の嫌いな人がいる」の場合、解釈領域は最大の「この世」ではなく「日本」とする解釈の方が自然である。

◆仮説(3)◆

部分集合文が存在を述べる事物は、下位類 (sub-kind)と個体(object)に限られる。  
局面 (stage)は部分集合文には現れない。

この仮説を次の例文で検証してみよう。

(44) [高速道路でバスが事故を起こした。非番の消防士 Paul がたまたま通りかかり救助に  
当たった]

Paul s'est introduit dans le bus accidenté. Il y avait trois passagers qui ont été gravement  
blessés.

「ポールは事故を起こしたバスの中になんとか入った。重傷の乗客が三人いた」

この il y a 存在文には qui ont été gravement blessés「重傷を負った」という関係節があるので、一見すると「バスの乗客全員」を母集合とする部分集合文に見えるかもしれない。もしそうだとすると、この文は「バスの乗客のなかには重傷の者が全部で三人いた」という意味になる。しかし本稿ではこの解釈は正しくないと考える。それは次の理由による。

この例では「ポールは事故を起こしたバスの中になんとか入った」という先行文脈によって、「ポールがバスの中に入った場面」という状況 s が設定される。次の il y a 存在文は状況 s の限定された時空間で成り立つ文である。するとこのとき「重傷を負った三人の乗客」 trois passagers qui ont été gravement blessés は局面レベルの存在であるとみなすのが妥当である。この文が述べている内容はポールの目に映った場面であり、その場面に重傷を負った乗客が三人いたことを意味している。バスの乗客全員のなかで重傷者が全部で三人いたことを意味しない。ポールが探索を続ければさらに重傷者が発見される可能性を除外しない。

この文は母集合を持たないので、三分構造で書くことはできない。この文に与えることのできる論理式は次のようになる。以下、上付きの s は局面レベルを o は個体レベルを、k は類レベルを表す。R は実現関数である。「三人」という情報は略す<sup>8</sup>。

$$\exists x^s [ R(x^s, \text{passager}^k) \wedge \text{être-gravement-blessé}(x^s) ]$$

一方、よく似てはいるが次の例は部分集合文である。

<sup>8</sup> この論理式は時空変数 s を用いて次のように書くこともできる。  $\exists x \exists s [ \text{passager}(x, s) \wedge \text{être-gravement-blessé}(x, s) ]$  こうすると passager という述語も être-gravement-blessé という述語も、特定の時空間 s においてのみ成り立つことをよく示すことができる。

(45) [高速道路で事故を起こしたバスの事故処理を済ませ、負傷者を病院に送り出した救助定員が、現場から少し離れた隊長の所に来て報告する]

Il y a trois passagers qui ont été gravement blessés.

「重傷を負った乗客が三人おります」

隊員は重傷者の数を数え、全部で三人であることを確認して報告している。したがって、この段階では重傷の乗客は限定された時空間に束縛された局面レベルではなく、バスの乗客全員の中で確認された個体レベルの存在である。次の論理式を与えることができる<sup>9</sup>。

$\text{trois } x^0 [\text{passager}(x^0) \wedge x \ll \text{ce bus}] [\text{\acute{e}tre-gravement-bless\acute{e}}(x^0)]$

(44)と(45)の差は微妙なので異論があるかも知れない。(44)は場面を持つ発話で、(45)は場面から離れた発話である<sup>10</sup>。(44)は視点を含む発話で、(45)は視点を含まない発話と言ってもよい。

この差は定延 (2004)が提唱する「マイクロ探索」と「マクロ探索」の区別に対応しているように思われる。

「探索は、その時間的スケールに応じて、マクロ探索とマイクロ探索に区分される。たとえば、或る部屋を探索領域とするマクロ探索とは、その部屋に入った時点で始まり、その部屋を退出した時点で終了する一つの大きな探索である。(…)このようにスケールの大きなマクロ探索とは別に、探索領域がある部屋の中で一瞬一瞬連続しておこなわれる、スケールの小さな探索がある。それがマイクロ探索である。いまおこなうマイクロ探索は次の瞬間にはもう終わり、過去のものとなっている。」(定延 2004: 15)

定延はこの概念を次のような言語的差異の説明に用いている。山にハイキングに行き、サルを発見したとき、次の両方の発話が可能である。

- (46) a. ほら、あんなところにサルがいるよ。  
b. ほら、あんなところにサルがいたよ。

ところがサルの大きさに驚きそれを述べるときは、a.しか言えない。

---

<sup>9</sup> この式の中の  $x \ll \text{ce bus}$  は、「x がこのバスの乗客である」ことのラフな表現である。正しくは  $\text{ce bus}$  から連想照応により  $\text{les passagers de ce bus}$  の集合を導き、 $x$  はその集合の成員であると表現すべきだが、煩雑なので省略した。

<sup>10</sup> もちろん(42)は隊員が隊長に報告している場面を想定するが、ここで言うのは事故の場面である。

- (47) a. 大きいな～。  
b. \*大きかったな～。

さらに山から下りて山の様子を人に話すときは、また両方が可能になる。

- (48) a. あの山にはサルが {いるよ / いたよ}。  
b. あの山のサルは {大きいよ / 大きかったよ}。

サルがいる現場から離れたときには文型の制約は見られないが、サルがいる現場での発話に限って存在文では過去形も非過去形も可能で、存在文以外では非過去形しか使えないのなぜかという間に、定延は次の仮説をもとにして答えている。

「体験由来の知識表現の場合、話し手が情報をイメージするためのアクセスポイントは命題の成立時点ではなく体験の時点である。『た』は体験時点が過去であることを表す」

山から下りてもうサルが現場にいないときは、山を探索領域とするマクロ探索という体験として表現できる。マクロ探索は探索時間が長いので、存在情報もそれ以外の情報も得ることができるため文型に差は出ない。一方、発話現場にサルがいるときは、そのサルに関する体験はマイクロ探索で得られる情報に限定される。マイクロ探索は探索時間が短いので、一度で得られる情報量には限りがある。あらゆる情報のなかで最も基本的なのは存在情報である。このため存在情報を表す (46) では文型に差が見られない。ところが「大きいな～」というサルの大きさに関する発話は、サルの存在が認定されて始めて可能なものである。文型の制約はこの差を反映したものである。(以上、定延 2004 : 22-23 の要約)

定延が提案するマクロ探索とマイクロ探索という概念を援用すると、(44) (45) の例文は次のようにも説明できる。(44) の *Il y avait trois passagers qui ont été gravement blessés*. 「重傷の乗客が三人いた」は、Paul の体験に基づくマイクロ探索による表現である。一方、(45) で消防隊員が報告する *Il y a trois passagers qui ont été gravement blessés*. 「重傷を負った乗客が三人おります」は事故現場を離れた知識表現であり、マクロ探索に基づくものである。マイクロ探索はその定義上、一瞬一瞬行われる短時間のものだから、マイクロ探索で認識できるのは局面レベルの存在に限られる。マクロ探索は探索時間の長いものであるため、個体レベルの存在を認識でき、集合を形成することが可能となる。

もしこの推論が正しければ、定延が指摘した文型のちがいに、定延のとはやや異なる説明を与えることもできる。サルを目の前にして大きさを述べるときは、「大きいな～」は自

然で「\*大きかったな～」は不自然である。「大きい」は個体レベル述語で、個体レベルの存在について適用されるものである。個体レベル述語は時間的に安定した述語であり、認識のアクセスポイントが現在であるか過去であるかに左右されない。このため、体験のアクセスポイントが過去であることを表す「\*大きかったな～」は不自然になるのである。

仮説 (3) のように部分集合文に現れるのは個体レベルの存在に限られるとすると、実は都合の悪いことがひとつある<sup>11</sup>。もう一度(45)とその論理式を見てみよう。

(49) Il y a trois passagers qui ont été gravement blessés.

「重傷を負った乗客が三人おります」

$\text{trois } x^0 [\text{passager}(x^0) \wedge x \ll \text{ce bus}] [\text{\acute{e}tre-gravement-bless\acute{e}}(x^0)]$

実はこの論理式は正しくない。核作用域の述語 *\acute{e}tre-gravement-bless\acute{e}* は局面レベル述語なので、局面レベルの変数を取り、次のようになるはずである。

(50)  $\text{trois } x^0 [\text{passager}(x^0) \wedge x \ll \text{ce bus}] [\text{\acute{e}tre-gravement-bless\acute{e}}(x^s)]$

しかし、こうすると変数の存在レベルが合わなくなり正しい式ではなくなる。そこで東郷（近刊）では、局面レベルから個体レベルへのアップデートが起きるといふ仮説を提案した。直感的には次のようなことである。例文を変えよう。

(51) Dans cette classe, il y a trois \acute{e}l\`eves qui ont attrap\acute{e} la grippe.

「このクラスには流感にかかった生徒が三人います」

朝のホームルームでの担任教師の発言だとする。流感にかかった三人の生徒は欠席していてもよい。しかしこの文は、流感にかかった生徒はもう回復して出席しており、欠席者がいないクラスで、担任教師が生徒にうがいや手洗いなどの注意を呼びかける発話としても成り立つ。「流感にかかる」*attraper la grippe* は局面レベル述語である。しかしその出来事は罹患歴としての属性に転化される。だから、春になってから「この冬に流感にかかった人はいますか」という質問に三人の生徒が手を挙げたとき、それは罹患歴を持つ生徒としてクラスの中で部分集合を形成する。局面レベルから個体レベルへとアップデートされたのである。

形式的には次のように表現できる。生徒が流感にかかるのは局面レベルの出来事であり、生徒も局面レベルの存在である<sup>12</sup>。

<sup>11</sup> この問題は東郷（近刊）で詳しく論じている。

<sup>12</sup> 煩雑になるので「三人」は式から省略してある。

(52) Trois élèves ont attrapé la grippe. 「生徒が三人流感にかかった」

$$\exists x^s [ R(x^s, \text{élève}^k) \wedge \text{attraper-la-grippe}(x^s) ]$$

次に生徒の存在レベルを局面レベルから個体レベルにアップデートする。この操作は一般式として次のように表現できる。 $P^k$ は任意の名詞述語を表す。この式が表しているのは、類レベル  $P$  の局面レベルの存在  $x^s$  があるときは、 $x^s$  に対応する個体レベルの  $x^0$  が存在するということである<sup>13</sup>。

$$(53) \exists x^s [ R(x^s, P^k) ] \rightarrow \exists x^0 [ R(x^s, x^0) ]$$

これを (52) に適用すると次の式を得る。

$$(54) \exists x^0 [ R(x^0, \text{élève}^k) \wedge \text{attraper-la-grippe}(x^s) ]$$

次に述語 *attraper-la-grippe* の取る変数を局面レベルから個体レベルにアップデートしなくてはならない。これにはいくつかの方法があるが、ここでは「流感にかかった」から「流感にかかったことがある」への読み替が起きると想定しておこう。この読み替えで *attraper-la-grippe* の変数が  $x^s$  から  $x^0$  置き換わるとすると、次の式を得る。

$$(55) \exists x^0 [ R(x^0, \text{élève}^k) \wedge \text{attraper-la-grippe}(x^0) ]$$

この変数の置換は「流感にかかる」という出来事を、マイクロ探索によって認識するかマクロ探索によって認識するかの違いに対応する。「生徒が三人流感にかかった」という局所的な出来事を、より長い時間幅と広い視野に立って眺め直すと、「今シーズンは流感にかかった生徒が全部で三人いた」という認識に置き換わる。

このような変数の置換は恣意的な操作に見えるかもしれないが、実は他の言語現象においても必要とされるものである<sup>14</sup>。

(56) The rat was (just) reaching Australia in 1770. (Carlson et al. 1995)

---

<sup>13</sup> 存在レベルのアップデートというアイデアは、Lumsden (1988) にすでに見られる。Lumsden は次の式を提案している： $\exists x^s [ R(x^s, P^k) ] \rightarrow \exists x^0 [ R(x^0, P^k) ]$ 。ただし、Lumsden はこれを単なるアイデアとして触れているだけで、本稿のような規模で用いているわけではない。

<sup>14</sup> A boy came in. He sat down in a sofa. の第一文の存在量化詞の作用域が第一文の終わりで切れるため、第二文の *he* の照応ができなくなるという古典的パラドックスに適用できることは東郷 (近刊) で論じている。



the rat は類レベルの名詞句と解釈できる。つまりオーストラリアにそれまでいなかった類としてのネズミが始めて出現したことを述べる文と解釈できる<sup>15</sup>。ところがこの文の述語 was (just) reaching Australia は局面レベルで、類レベルの変数を取ることができないはずである。述語の取る引数の不一致という同じ問題がここにある。現実の出来事としては、船倉に潜んだ何匹かのネズミがオーストラリアに上陸したのだが、その出来事が類としてのネズミの出現と認識されるのである。したがってここでは上陸したネズミが局面レベルから類レベルへと何らかの操作によってアップデートされていると考えざるをえない。

(57) [煙草を吸わないと思っていた人が煙草を吸っている所を目撃して]

Ah, tu fumes ! Je ne savais pas.

「ああ、君は煙草を吸うんだね。知らなかったよ」

Tu fumes. (=You smoke.)「君は煙草を吸う」は個体レベル述語で、習慣的喫煙を意味する。しかし私が目撃したのは一度きりの喫煙行為で、局面レベルの出来事である。マイクロ探索の対象である局面レベルの出来事の体験が、マクロ探索の対象である個体レベルの恒常的属性の知識へとアップデートされている。

次の例も同様である。

(58) Les élèves qui ont attrapé la grippe cette année sont tous myopes.

「今年流感にかかった生徒はみんな近眼だ。」

myope 「近眼である」は個体レベル述語なので、主語も個体レベルのはずである。しかし関係節 qui ont attrapé la grippe の述語は局面レベルである。すると les élèves qui ont attrapé la grippe cette année は局面レベルの述語を内部に持ちながら、全体としては個体レベルであるという矛盾した構造になっている。ここでも内側の局面レベル述語 qui ont attrapé la grippe が何らかの経路を通じて、個体レベルにアップデートされていると考えなくてはならない。

このように述語の存在レベルのアップデートは、総称名詞句の意味解釈や習慣文の意味解釈にも必要なものであり、本稿で仮定した変数の置換は恣意的なものではない。

### 5.3. 部分集合文の探索領域

もし本稿が考えるように部分集合文に登場するのが下位類 (sub-kind) レベルか個体 (object) レベルの存在に限られるとすると、(23)で示した談話モデルと Carlson の存在レベルとの対応関係から、次の仮説を導くことができる。ここでもう一度(23)を示しておく。

<sup>15</sup> もちろん the rat を特定の個体のネズミと取る解釈も可能だが、ここでの議論には関係しない。

(23) 談話モデルと Carlson の存在論の対応関係

- a. individual (kind, object)は共有知識領域に登録される。
- b. stage は発話状況領域に登録される。
- c. 言語文脈領域には kind / object / stage のすべてが登録される。

◆仮説(4)◆

部分集合文の真偽が評価される探索領域は共有知識領域である。

「今日欠席している生徒が三人いる」Il y a trois élèves qui sont absents aujourd’hui. の場合、担任教師は教室を見渡して欠席者のいることに気付いて発話するのだから、探索領域が共有知識領域だというのは奇異に感じられるかもしれない。探索領域は発話の現場ではないかという意見もありうる。しかしそれは教室の場合、たまたま目に見える机の数が生徒の母集合の数と一致しているからにすぎない。「なくなった鍵が二本ある」Il y a deux clefs qui ont disparu.の例を考えてみればこのことはすぐわかる。家の鍵は全部で6本あるとしよう。抽出を開けて話し手が実際に確認するのは、抽出には鍵が4本あるという事実だけである。ここから「2本足りない」という観察を導くためには、共有知識領域にある鍵の母集合を参照しなくてはならない。したがって探索領域は共有知識領域だと考えるべきなのである。

#### 5.4. 類レベルの存在言明

ここでやや横道に逸れるが、類 (kind)レベルの存在は il y a / il existe を用いて存在言明することができず、通常の主語・述語文を用いてもその存在を直接に述べにくいことに注意しておきたい<sup>16</sup>。

(59) a. ?Les pandas existent.

「パンダは存在する」

b. Il y a { \*les pandas / \*des pandas }.

「パンダ (定冠詞) / パンダ (不定冠詞)はいる」

c. Il existe { \*les pandas / \*des pandas }.

「パンダ (定冠詞) / パンダ (不定冠詞)は存在する」

類レベルの存在言明は金水の存在文の分類には含まれていない。西山 (1994)では実在文「ペガサスは存在しない」、西山 (2003)では「間スペース対応存在文」がこれに当たる。

<sup>16</sup> Il y a des pandas dans ce zoo. のような場所存在文はもちろん可能である。しかしこのときパンダは個体 (object) レベルであり、類 (kind)レベルではない。

類レベルの存在言明が難しいのは次の理由によると思われる。類レベルの存在は共有知識領域に登録されており、談話モデル内で強い存在前提を持つ。このためその存在を改めて言明することに情報価値はなく、Griceの量の格率に違反する。このため類レベルの存在言明は文法的に非文となるのではなく、語用論的に無価値言明として排除されると考えられる。

ただし、類の下位レベルである sub-kind の存在は必ずしも前提されておらず、それを述べることは量の格率に違反しない。

(60) Il y a des reptiles qui sont parthénogénétiques.

「爬虫類の中には単為生殖するものがある」

「爬虫類」はみんなの共有知識領域に登録されて存在前提を持っていても、「単為生殖する爬虫類」という下位類までは登録されていない可能性があり、このとき部分集合の存在言明は情報価値を持つ。

ちなみに des reptiles は複数不定冠詞が付いている。ふつう類レベルの存在に言及するときは総称文となり、単数不定冠詞 un か複数定冠詞 les か単数定冠詞 le を取る。複数不定冠詞 des は総称命題を作ることができないが、この例で下位類を指すことができるのはこの文が部分集合文であるからに他ならない。

類レベルの存在言明は西山が挙げる例「ペガサスは存在しない」のように、否定文の形を取って実際に用いられることがある。この場合、西山 (2003) が正しく指摘しているように、この文は複数のメンタル・スペースにまたがる間スペース文である。

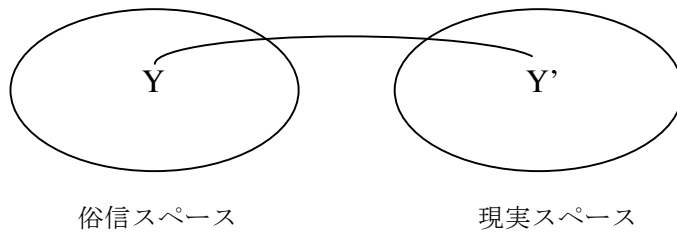
(61) a. イェティは実在することが判明しました。

b. スパイダーマンって本当にいるんだよ。

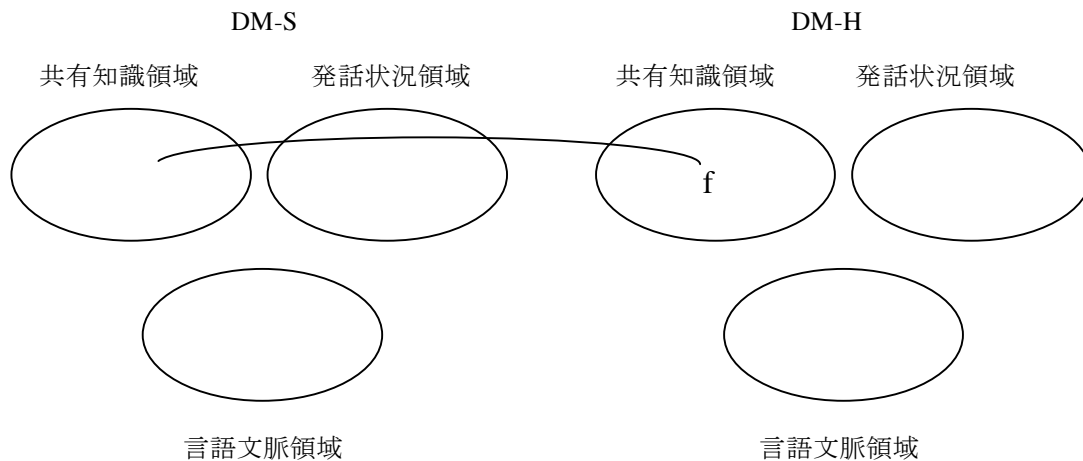
c. 幽霊なんて本当はいないよ。

このような文が実際に用いられる場合を考えると、「幽霊はいる」のように存在動詞「いる」「ある」による直接的言明はやや不自然である。a.のように「実在する」という動詞や、b.の副詞「本当に」、b. c.の「～って」「～なんて」を添える方が発話として自然である。これらはすべて複数のメンタル・スペースにまたがる間スペース文であることを表示するマーカーと見なすことができる。

a.では俗信スペースと現実スペースが関係しており、俗信スペースにおいてしか存在が認められていなかったイェティが現実スペースでも存在すると述べる文である。b.は「アメリカンコミックの世界」と「現実スペース」が、c.では「君」のスペースと「私」のスペースが関係している。a.を例にとるとメンタル・スペースの図式では次のようになる。



俗信スペースは個人に帰属するものではなく集合的スペースであり、この図のようなメンタル・スペース理論の図式は確かに説明に便利である。しかし集合的スペースは個人のスペースが集積したものであり、究極的には個人のスペースに還元されると考えるべきである。これをよく示しているのが上の例の c. 「幽霊なんて本当はいないよ」である。状況としては、恐がりで幽霊がいると堅く信じている聞き手に向かって私が発話している場面を想定する。すると談話モデルでは次のように表示できる。f は幽霊を指す談話指示子である。



聞き手の談話モデル DM-H の共有知識領域に登録されていて、聞き手にとって存在前提を持つ幽霊 f は、コネクタで結合された話し手のモデル DM-S の共有知識領域に対応物をもたない。一般に間スペース文は、「映画スペース」と「現実スペース」のような集合的スペースを結合するとされているが、その集合的スペースを分解還元すれば、この図のような個人の信念のスペースに帰着するものと考えられる。談話モデルでは「現実スペース」などというものはどこにも想定していない。「現実」とは私が現実と信じているものであり、私の信念の一形態にすぎないからである。

「幽霊なんて本当はいないよ」の「なんて」は引用形式であり、「などと」「というのは」「って」などと並んでメタ形式の一種である<sup>17</sup>。

- (62) a. あいつ、明日は来られないなんて言ってるよ。  
 b. 減感作療法って何ですか。

<sup>17</sup> 日本語のメタ形式については、田窪 (1989)、藤村 (1993)を参照のこと。

メタ形式は a. のように他人の発言を引用する場合と、b.のように自分がその意味を知らない語を用いる場合に添えるのが基本的用法であるとされる<sup>18</sup>。

メタ形式の談話モデル的解釈をかんたんに示しておく次のようになる。

メタ形式「N トイウ」は、N の談話指示子が自分の談話モデル内に登録されていないこと、あるいは / そして、N の談話指示子が聞き手や第三者の談話モデルにのみ登録されていることを表示する形式である。

上の例 b.では話し手は「減感作療法」の意味を知らず、この表現の談話指示子が自分の談話モデル内の共有知識領域に登録されていない。また a.では「明日は来られない」という「あいつ」の発言を引用しており、情報の出所は第三者にある。このため「なんて」を用いると、その発言が信じられないとか言語道断であるといったニュアンスを帯びる。次も同様である。「などと」には発言を信用しないという強いニュアンスが含まれる。

(63) X 事件の容疑者 Y が逮捕されました。調べによると、Y は「殺すつもりはなかった」などど主張しているもようです。

「幽霊なんてほんとうはいないよ」では、メタ形式「なんて」は幽霊に相当する談話指示子は聞き手の談話モデル内にしか登録されていないことを表示する。つまり「君が信じている幽霊」「君の言う幽霊とやら」という意味であり、話し手はそれに関して責任を負わないことを表しているのである。

西山 (2003)は「ハムレットは存在しない」という間スペース対応存在文の意味論を論じて、これは「ハムレットは、実在人物ではない」という意味であり、「ハムレット」に「実在人物ではない」という属性を付与する措定コピュラ文の一種であると結論している。しかしこの分析は妥当なものとは言えない。間スペース文は、結合された二つのスペースに問題の談話指示子が登録されているか否かを探索する文型であり、その意味機能は、コネクタで結合することにより、スペース間の登録情報の一致（不一致）を査定することにある。「田中君は学生だ」のような措定文と同一視することができるものではない。

## 6. 場所存在文

### 6.1. 場所存在文の両義的性格

先に金水と西山の存在文の分類を検討したとき、「机の上にバナナがある」のような典型

---

<sup>18</sup> ただし最近の若者の言葉では「高木さんって優しいね」のような用法が拡大している。また、「いやあ、映画ってほんとうにおもしろいものですね」のように、すでに知っている映画のイメージを自分の中で更新する場合にも用いられる。

的な存在文は、西山の分類では「場所・存在文」とされていたが、金水の分類では該当するものがないことを見た。これはなぜだろうかという問題を考えてみたい。

まず金水は、このタイプの存在文には次のような曖昧性があることを指摘している。

(64) 眼前描写文か限量的存在文か曖昧な例 (金水 2002)

立つて見てみると、時々書庫の中から、厚い本を二三冊抱へて、出口へ来て左へ折れて行くものがある。(夏目漱石『三四郎』)

もしこの存在文を登場人物の目から見た描写と取るならば眼前描写文だが、語り手の立場から人物を物語に導入していると取るのなら限量的存在文と見なされると金水は述べている。もし後者だとすると初出導入文だと思われる。

金水の指摘は正鵠を射たものであり、ここに存在文のように強い文脈依存性を示す文型を考察するときの大きな困難がある。本稿の主張は、「A に B がある/いる」のような単純な形式の文型にも大きな文脈依存性があり、文脈が異なればその意味価値が異なるということである。ここではわかりやすいように「文脈依存性」という用語を用いたが、本稿が立脚する「話し手と聞き手の相互行為としての談話」というモデルに置いて語るならば、存在文は談話モデルの構築状態に依存してその意味価値を変えるということになる。

本稿では「机の上にバナナがある」のような存在文を、西山の用語にならって場所存在文とした。場所存在文は対象の空間的存在を述べる文で、場所句を付けることができ、ない場合でも文脈的に含意される。また場所句はフランス語では文末がよく見られる位置だが、文頭にも置くことができる。

(65) a. Il y a des bananes sur la table. / Sur la table, il y a des bananes.

b. 机の上にバナナがある / バナナが机の上にある。

まず場所存在文の初出導入文としての性格が明瞭なのは、物語の冒頭で登場人物を提示するのに用いられる場合だろう<sup>19</sup>。

(66) a. Il était une fois, dans un pays lointain, un sorcier méchant.

b. 昔々ある国に意地の悪い魔法使いがいました。

ところが同じ文型に次のように直示的要素を加えると眼前描写文の性格が濃厚になる。

---

<sup>19</sup> 次例は通常の非人称動詞 *il y a* ではなく *il était* が用いられている。*il était* は文語的で *il y a* と同じ機能を持つ存在動詞である。

(67) Regarde ! Il y a des voitures de police devant ta maison !

「見て。君の家の前にパトカーがいるよ」

Regarde ! 「見て」によって、この存在文は話し手と聞き手の眼前で展開される事態を述べる文であることが明示される。確かに金水の指摘するように、場所存在文は両義的性格を持つのである。最も典型的な存在文になぜこのような両義性が内包されているのだろうか。以下ではここに存在文における探索領域の問題が深く関係していることを示す。

## 6.2. 初出導入文としての場所存在文

まず場所存在文が初出導入文として用いられる例から詳しく見てみよう。

(68) Il y avait une fois en Espagne, un jeune taureau qui s'appelait Ferdinand. Tous les autres taureaux élevés avec lui couraient et sautaient à longueur de journée en se poussant de la tête. Mais pas Ferdinand. (M.Leaf, Ferdinand)

「昔々スペインに、フェルディナンドという名前の若い雄牛がおりました。いっしょに育った牛はみな、日がな一日、走り回り、頭を付き合わせておりました。でもフェルディナンドはちがったのです」

初出導入文は事物を物語世界に導入する機能を持っている。この例では Ferdinand 「花の好きな牛」という表題の物語である。名詞句 un jeune taureau qui s'appelait Ferdinand はその世界に対して存在が言明される。このとき存在を言明される事物は、具体性に乏しく観念的・抽象的把握をされており、金水の言う限量的存在文の特性に合致している。

本稿では初出導入文としての場所存在文は、次のような特徴を持つと考える。

(A) 初出導入文としての場所存在文が解釈される探索領域は、言語文脈領域の中に構築された物語スペースである。

(B) このとき存在を導入される事物は個体 (object) レベルである。

$\exists x^0 [ R(x^0, \text{taureau}^k) \wedge \text{'appeler-Ferdinand}(x^0) ] \in \{\text{言語文脈領域}\}$

N.B.  $\in$  記号は、この論理式が言語文脈領域において成り立つことを表す便宜的記号である。

(A) は、「文が表す言語情報は談話モデルの言語文脈領域に登録され蓄積される」という本稿の前提に由来する。また冒頭で物語に導入される対象は、特定の場面・状況に依存するものではなく、物語を通じて存在する登場人物なので、個体レベルだと考えられる。上の例では qui s'appelait Ferdinand 「フェルディナンドという名前の」という個体レベル述語

の関係節が付いていることも、この傍証となる。金水の言う「具体性に乏しく観念的・抽象的把握をされている」という特徴づけは、その対象が個体 (object) レベルであることを述べている。なぜなら個体 (object) レベルとは、具体性に富む局面 (stage) レベルから、抽象化によって導かれた存在だからである。

すでに見たように初出導入文には、定名詞句は現れることができないという定性制約 (definiteness restriction) がある。

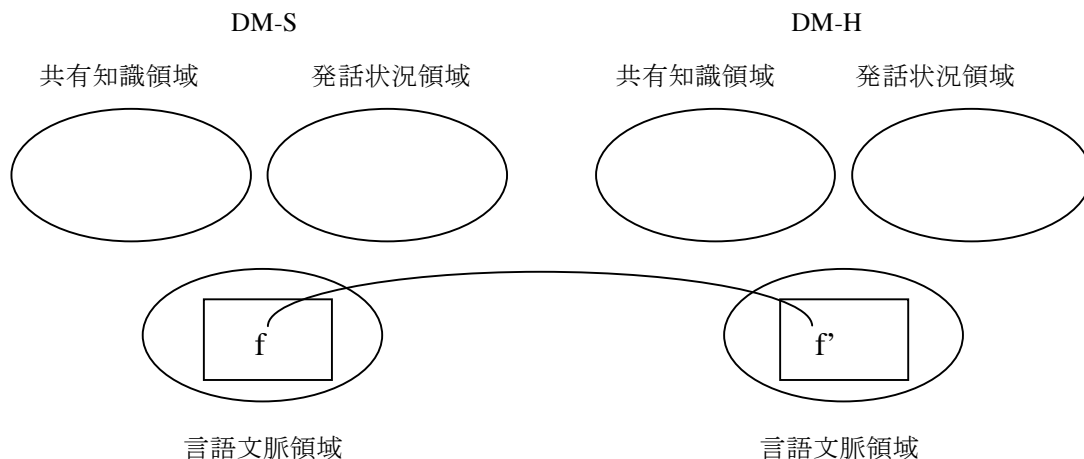
(69) Il était une fois { un prince / \*le prince } malheureux.

「昔々ある所に、不幸せな王子様がおりました」

初出導入文に定性制約がある理由は次のように考えられる。言語文脈領域が探索領域のとき、定名詞句 *le N* は *N* に属する事物がすでに登録済みであることを表す。登録済みの談話指示子はその領域において存在前提を持つ。存在前提をもつ事物の存在を述べることは、情報的に無価値であり Grice の量の格率に違反する。

また上の例のように、*une fois en Espagne* のような物語スペースの時空間を設定する場所句が実主語より前に置かれていることが多い。これは存在を導入するのが言語文脈領域に作られた物語世界というスペースであることを明示するためであり、場所句はスペース構築子 (space builder) として働いている<sup>20</sup>。初出導入文の探索領域は、場所句 *une fois en Espagne* が限定する言語文脈領域内の時空間ということになる。

談話モデルの図式で表すと次のようになる。



言語文脈領域の中に作られた四角は、物語スペースを表し、その中に登録された *f* は、登場人物 *Ferdinand* の談話指示子である。

上に述べたように、初出導入文の場所句は対象が導入される物語世界というスペースを構築する。したがって、用いられる場所句は物語世界に見合うような広がりを持つものでなくてはならない。*Ferdinand* の例の *une fois en Espagne* はこの条件に合致する。しかし物

<sup>20</sup> 場所句の場面設定作用については東郷 (2005)を参照。



語世界に見合わないような狭い場所句を付けると、容認度が低下する<sup>21</sup>。

(70) ??Il était une fois un sorcier méchant dans une cabane minable.

「昔々、みすぼらしい掘っ立て小屋に意地悪な魔法使いがおりました」

この観察からも、初出導入文の場所句はスペース構築子であり、確かに存在文の探索領域となっていることが確かめられるだろう。

### 6.3. 眼前描写文

眼前描写文は話し手の目の前で展開中の事態を述べる文であるので、探索領域は発話状況領域と考えるのが自然だろう。眼前描写存在文の特徴を次のように規定する。

(71) 眼前描写存在文

Regarde ! Il y a des voitures de police devant ta maison !

「見て！君の家の前にパトカーがいるよ」

(A) 眼前描写存在文の探索領域は発話状況領域である。

(B) 発話状況領域に登録できる事物は局面レベルに限られる。よって眼前描写存在文が存在を述べる事物は局面レベルである。

$\exists x^s [ R(x^s, \text{voiture-de-police}^k) \wedge \text{devant-ta-maison}(x^s) ] \in \{\text{発話状況領域}\}$

N.B.  $\in$ 記号は、この論理式が発話状況領域において成り立つことを表す便宜的記号である。

(B)が述べているのは、実は存在文だけでなく、すべての眼前描写文に共通の特性である。眼前描写文は話し手・聞き手の眼前という時空間的に狭く限定された場面での事態を述べるものなので、そこに含まれるあらゆる存在は時空間の束縛を受ける局面レベルだと考えられる。その証拠として、眼前描写文の実主語に付く関係節の述語は局面レベル述語に限られ、個体レベル述語は許容されない。次の例が示す通りである。

(72) a. Regarde ! Il y a Paul qui est en train de draguer une fille ! [局面レベル述語]

「見て。ポールが女の子をナンパしてるよ」

b. Regarde ! \*Il y a Paul { qui est grand / qui a les yeux bleus } ! [個体レベル述語]

---

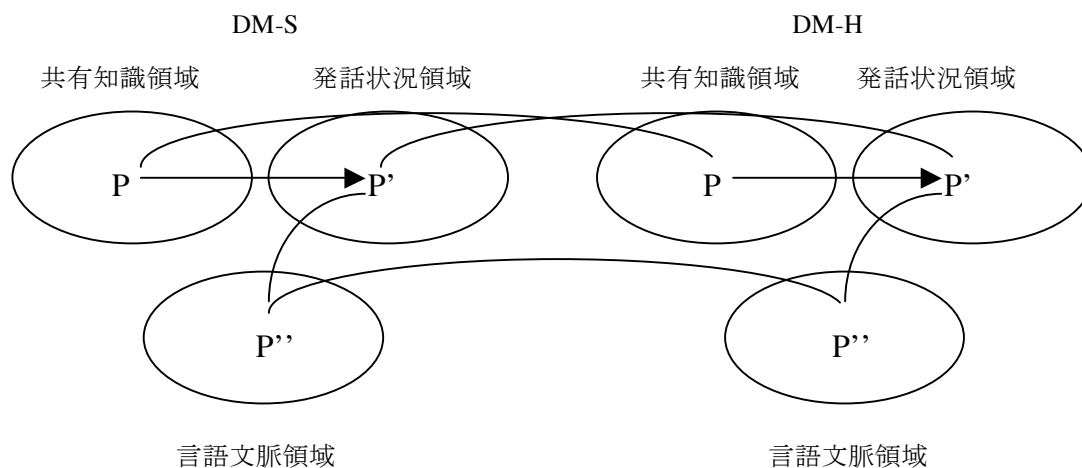
<sup>21</sup> Il était une fois un sorcier méchant *qui habitait* dans une cabane minable. のように関係節にすると容認される。このとき dans une cabane minable は物語スペースの構築子ではない。物語スペースは une fois だけが構築する漠然とした昔の世界になる。

「見て。ポールが背が高いよ / 目が青いよ」

眼前描写存在文の解釈を談話モデルを用いて表現すると次のようになる。

Regarde ! Il y a Paul qui est en train de draguer une fille !

「見て。ポールが女の子をナンパしてるよ」



共有知識領域に登録された  $P$  は個体レベルの Paul、発話状況領域にある  $P'$  は発話の場で目撃された局面レベルの Paul、言語文脈領域にある  $P''$  は言語表現としての Paul である。DM-S の  $P$  は話し手が以前から知っている Paul で、これは DM-H の  $P$  と同じものだから ID コネクタで結合されている。DM-S の  $P'$  は話し手が今見ている Paul で、これも聞き手が見ている Paul と同一なので ID コネクタで結合される。 $P''$  同士がコネクタで結ばれているのは当然で、話し手の発話に含まれる談話指示子は聞き手が聞いたものと同一である。 $P'$  と  $P''$  も結合されているが、これは発話の場で目撃された指示対象の談話指示子が言語的に表現されたものであることを表している。 $P$  と  $P'$  はコネクタではなく矢印で結ばれているが、この矢印は個体レベルから局面レベルを切り出す実現関数  $R(x^s, x^0)$  に相当する。 $P'$  は話し手・聞き手が前から知っている Paul の時間的切片である。

### 6.3.1. 局面レベルと存在前提

では眼前描写存在文が存在を述べる対象が局面レベルであると見なすと、どのような問題が解決できるかを見よう。すでに見たように眼前描写文では存在文に課せられる定性制約が解除される。

(73) Regarde ! Il y a le Père Noël devant ta maison !

「見て。君の家の前にサンタクロースがいるよ」

$\exists x^s [ R(x^s, \text{Père-Noël}^0) \wedge \text{devant-ta-maison}(x^s) ] \infty \{ \text{発話状況領域} \}$

なぜ定性制約が解除されるのかは次のように説明することができる。類( kind)レベルと個体 (objec) レベルの存在は、共有知識領域に登録されており存在前提を持つ。しかし局面 (stage)レベルの存在は、出来事を構成する要素として、類レベルや個体レベルの存在からその都度新たに切り出されるものであり、存在前提をいかなる領域にも持たないと考えられる。したがって、すでに存在前提を持つ事物についても、その局面レベルの存在を新たに述べることは Grice の格率に違反せず、文として情報価値を持つのである。

上の(73)を例に取ると、「この世にサンタクロースがいる」ことは子供なら誰でも知っていて信じている。したがって、多くの信じやすい子供の共有知識領域には、サンタクロースが登録されている。しかし、ある日ある時、誰かの家の前にサンタクロースがいるということは、十分に新しい情報でありその存在を述べることは意味ある情報である。

このことを形式的には (73)の論理式で示してある。実現関数の  $R(x^s, \text{Père-Noël}^0)$  は、個体レベルのサンタクロースから局面レベルの変数  $x^s$  を切り出す。(73)の存在文はこの局面レベルの変数  $x^s$  について、その発話状況領域における存在を言明している。 $x^s$  は言わばサンタクロースの時空間的切片である。

眼前描写文の局面レベルの切り出し効果は、存在文の定性制約を説明するばかりでなく、時制の領域にも応用できることに注意しよう。Lakoff (1987)は直示的 there 構文では、次の例のように単純現在時制が用いられることを指摘している。

(74) a. Here comes Harry with his red hat on.

「ハリーが赤い帽子をかぶってこっちに来るよ」

b. There goes the bell now !

「ほらベルが鳴ってる」

英語の単純現在時制は **Harry comes here sometimes**. 「ハリーはときどきここに来る」のように習慣的事柄を述べるものであり、今ここで起きている事態を表すことはない。ところが直示的 there 構文に限っては、今ここで起きている事態を表すことができる。これは直示的 there 構文が **Harry (with his red hat on)**を局面レベルに切り出すだけでなく、時制にも切り出し効果を及ぼすため、単純現在時制に「今ここ」(here and now)という直示的意味を表すことか可能になるためである。

確かに金水の言うように、存在文には初出導入文か眼前描写文か判別がつきにくい両義的性格が見られる。しかし、存在を言明される事物を調べてみると、初出導入文は個体レベルであるのにたいして、眼前描写文は局面レベルという大きなちがいが見られる。

次節ではもうひとつの大きなちがいである場所句の機能を見る。

### 6.3.2. 場所句の問題

本稿の冒頭で見たように、フランス語の存在文で場所句を付加できるのは、場所存在文と眼前描写文の二つに限られる。場所存在文も眼前描写文も場所句が表面上ないこともあるが、文脈的に含意されている。しかし、場所存在文と眼前描写文とでは場所句の機能が大きく異なる。ここではまず場所存在文を金水の言う初出導入文に限定して、眼前描写文と比較対照しよう。

(75) a. *Il était une fois en Espagne un prince malheureux.* [初出導入文]

「昔々スペインに不幸せな王子様がおりました」

b. *Regarde ! Il y a une voiture de police devant ta maison.* [眼前描写文]

「見て! 君の家の前にパトカーがいるよ」

すでに述べたように、初出導入文の場所句 *en Espagne* はスペース構築子として言語文脈領域の中に物語スペースを設定する。初出導入文の探索領域はこの物語スペースであり、上例で *un prince malheureux* はこの物語スペースに存在すると述べられている。したがって場所句「スペインに」は、確かに不幸せな王子様の存在場所である。

しかし、眼前描写文の探索領域は場所句 *devant ta maison* 「君の家の前に」が表す空間領域ではない。眼前描写文の場所句はスペース構築子ではなく、発話状況領域の中に新たにスペースを設定するものではない。眼前描写文の探索領域は、話し手と聞き手が含まれる発話状況領域と考えるべきである。このことは場所句のない眼前描写文を見るとよくわかるだろう。

(76) *Regarde ! Il y a Estel qui se balade.*

「見ろよ。エステルがぶらぶら歩いているよ」

エステルは通りを歩いている、校庭を歩いているにもかかわらず。この眼前描写文が述べているのは、話し手と聞き手の目の前にエステルがいるということであり、ただそれだけである。仮に *Il y a une voiture de police devant ta maison.* のように、場所句が付いていても、それは発話状況領域の特定の場所に聞き手の注意を引きつけているにすぎない。

この例ではパトカーは聞き手の家の前にいる。だから *devant ta maison* はパトカーの「存在場所」ではないかという反論が予想される。しかしそれはちがう。存在文の意味論にとって本質的に重要なのは、事物がどの場所にあるかではなく、存在文の意味解釈にあたって聞き手はどの心的領域を探索しなくてはならないかである。談話モデル理論に照らせば、眼前描写文の探索領域は発話状況領域である。聞き手は眼前描写文であるというキューを受け取って、発話状況領域を探索することを求められるのである。

このように初出導入文と眼前描写文はともに場所句を付加することができるが、その働きはまったく異なる。初出導入文にとって場所句は、存在文の意味論に必要不可欠なスペース構築子であるが、眼前描写文にとって場所句はなくて済ませることのできるものである。それは眼前描写文には探索領域が与えられているが、初出導入文はスペース構築子によって新たに設定する必要があるためである。

### 6.3.3. 定性制約再考

場所存在文の定性制約について、西山 (1994)は次のように述べている。

「場所・存在文の主語 S は一般に定名詞句は許されず、不定名詞句であることが多い。そこから、『場所・存在文は、ある場所における不特定の対象の有無を表わす』という主張がなされる。たしかにこの点で、場所・存在文は、所在文と異なるわけであるが、この通説には若干の注釈が必要である。たとえば、次の文を見よう。

(5) 机の上に洋子のバイオリンがあった。

これはあきらかに場所・存在文であるが、下線部の「洋子のバイオリン」は特定の対象を指しているはずである。(…) 同様に、(7)でみられるように、固有名詞のごとくあきらかに特定の対象を指示する語であっても、それが談話のなかで話題にのぼっていないかぎり、場所・存在文の主語として十分許容できるのである。

(7) 中部地方には高い山が多い。たとえば、山梨県には富士山があり、長野県には御嶽山があり、富山県には立山がある。

不定名詞句は、すでに話題にのぼっている事物を指すという意味での前方照応 (anaphoric) の名詞句になりえないため、場所・存在文に登場しやすいのであろうが、場所・存在文の主語 S に対する制約としては、「不特定の対象を指す」という条件よりも、むしろ『その名詞句の指示対象が話題にのぼっていない』という条件のほうが適切であろう。」(西山 1994 : 119)

ここでは西山の主張が妥当なものかどうかを検討したい。場所存在文には確かに不定名詞句が生じることが多いが、それは「不特定のものを表す」ことが要請されるからではなく、むしろ当該の談話でまだ「話題にのぼっていない」ことが要請されると見なすべきだというのが西山の主張である。Prince (1992)の用語を用いると、存在文に生じる名詞句に課せられた条件は *hearer-new* ではなく *discourse-new* であるということになる。上の引用中の例「机の上に洋子のバイオリンがあった」の「洋子のバイオリン」は、話し手が知っている特定のバイオリンであってもよく(むしろそう解釈する方がふつうで)、談話に始めて登場するのなら場所存在文に生じることができるという主張である。果たしてこの主張は妥当なものだろうか。以下ではそうではないことを示す。

まず次の例を見よう。

(77) A: 立原教授の別荘を探しているのですが。

B: 立原教授の別荘は、その道の突き当たりにあります。〔所在文〕

B': ??その道の突き当たりに立原教授の別荘があります。〔場所存在文〕

この対話では「立原教授の別荘」はAの質問に含まれているので、Bの返答ではすでに話題にのぼっている既出名詞句である。したがってBのように所在文で答えるのが適切で、B'のように場所存在文で答えるのはおかしい。B'の容認度が低いことは、西山説で確かに説明することができる。

しかし次の例はどうだろうか。

(78) 葛原は立原教授の別荘を探して、軽井沢の林のなかをもう小一時間も歩き回っていた。そのうちに迷ったのか道がわからなくなった。ままよと当てずっぽうで歩いていると、急に木が少なくなり、開けた場所に出た。葛原はあたりを見回した。かすかに道らしきものが左手に続いている。その道をたどって行くと、大きな榆の木のかげに立原教授の別荘があった。

最後の「大きな榆の木のかげに立原教授の別荘があった」が場所存在文である。この文の名詞句「立原教授の別荘」は談話冒頭で導入されているので、既出名詞句である。すでに話題にのぼった名詞句が場所存在文に生じており、この例は西山説では説明することができない。またこれは明らかに特定の指示対象をさす定名詞句である。Princeの用語を用いると、「立原教授の別荘」は *hearer-old* かつ *discourse-old* である。従って、ふつう言われている「存在文には不定名詞句しか生じることができない」という制約でも、西山の「場所存在文には話題にのぼっていない名詞句しか生じることができない」という制約でも説明することができない。どのように考えるべきだろうか。

ここに金水が指摘した存在文の両義的性格がよく表れている。「大きな榆の木のかげに立原教授の別荘があった」は聞き手（小説なら読者）にとっては場所存在文（初出導入文？）だが、作中人物の葛原にとっては眼前描写文なのである。

まず一つ目の「立原教授の別荘」を検討しよう。これは語り手にとっても作中人物の葛原にとっても個体レベルの存在である。「探す」(*look for*) は個体レベルの目的語を要求する動詞である。次の例で *a nurse who speaks basque* には特定解釈と非特定解釈の両方が可能だが、いずれにせよ個体レベルである。

(79) I'm looking for a nurse who speaks basque.

「私はバスク語を話す看護師を探しています」

$\exists x^0 [ \text{nurse}(x^0) \wedge \text{speak-basque}(x^0) \wedge \text{look-for}(I, x^0) ]$

ところが二つ目の「立原教授の別荘」は、これを作中人物の葛原にとっての眼前描写文と取ると局面レベルになる。

(80) 大きな榆の木のかげに立原教授の別荘があった。

$\exists x^s [ R(x^s, \text{立原教授の別荘}^0) \wedge \text{大きな榆の木のかげ}(x^s) ] \propto$  葛原の発話状況領域

事物は作中人物の視野に映じたとき、時間的切片と化して局面レベルの存在となる。したがって葛原の目に映ったのは個体レベルの別荘ではなく、その時間的切片である。私たちの知覚が把握できるのは対象の時間的切片に限られるからである。

二つ目の「立原教授の別荘」は確かに定名詞句でかつ既出名詞句だが、すでに述べたように、存在レベルと探索領域が異なれば、その存在を新たに言明することには情報価値があり、非文にはならない。作中人物の葛原にとって一つ目の「立原教授の別荘」は個体レベルであり共有知識領域に登録済みである。しかし、二つ目の「立原教授の別荘」は局面レベルでその探索領域は発話状況領域である。このため「大きな榆の木のかげに立原教授の別荘があった」は意味ある文として適切に解釈される。以前から聞き及んでいる別荘であっても、それが目の前に現れたときは新たな発見という価値を持つのである。言い換えると、局面レベルは新しい時間的切片であり、文中で常に新情報として機能する。

西山があげている「机の上に洋子のバイオリンがあった」についても同じことが言える。この文には文脈がないが、存在文の持つ本質的両義性により、何らかの知覚主体にとっての眼前描写文と解釈できる。このため「洋子のバイオリン」が特定の指示対象であり、話し手にとって旧知のものであっても、その局面レベルは存在文に生じることができる。

存在文についてよく言われる「不定名詞句しか生じることができない」という制約も、「話題にのぼっていない名詞句しか生じることができない」という西山の制約も、指示対象を個体レベルと把握したときにのみ妥当な制約と考えるべきである。眼前描写文は存在レベルが異なるため、これらの制約に従わない。

#### 6.4. 場所存在文の両義性と談話モデルの埋め込み

それではなぜ金水が指摘する存在文の両義性が生まれるのだろうかという問題を、談話モデル理論の立場から考えてみたい。談話モデル理論はこのような問題を取り扱うのに適した理論装置である。

小説などの物語では「視点」が問題にされることか多い。作者はチェスの駒を自由に動かす神のごとき上空からの視点で物語を語るができる。また登場人物の一人に視点を

固定して、あたかもその人物が目撃した出来事であるかのように語ることもできる。前者の場合、視点は希薄化し拡散するので、読者は特定の視点を感じることはない。しかし後者の場合では、読者はあたかも視点を置かれた登場人物に同一化したかのごとく、その人物の視点を通して物語を体験する。

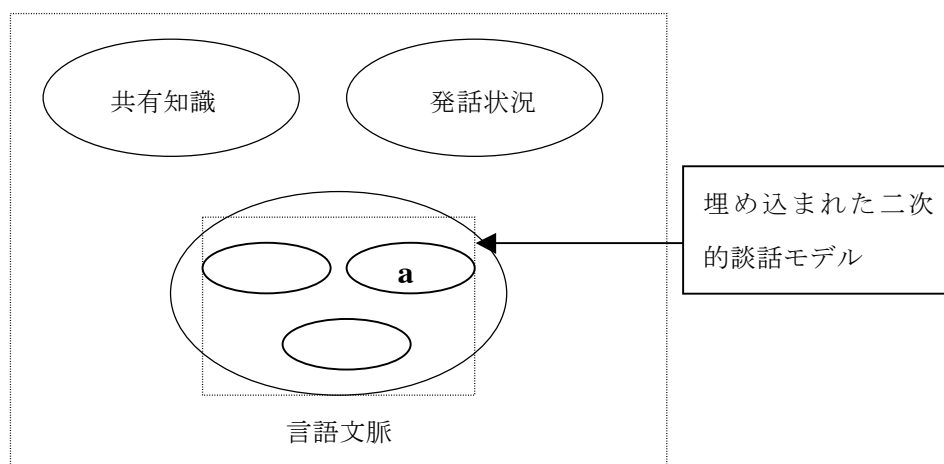
この視点の問題は言語においては特に直示表現に顕在化する。その典型は指示詞である。日本語の指示詞コに「視点遊離のコ」<sup>22</sup>と呼ばれる用法がある。

- (81) 畏友深代淳郎の走り書きのカードも出てきた。そういうものを伝統と称するならば、これはうかつに捨てられないと思った。(『天声人語』)<sup>23</sup>
- (82) うとうとして目が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている。この爺さんは慥かに前の駅から乗った田舎者である。(『三四郎』)<sup>24</sup>

(81)について正保は「内言をふまえている」としており、一種の間接話法と見る分析を示している。するとこの文は、『これはうかつに捨てられない』と思った」となり、コは現場指示となる。田窪・金水 (1996)は「登場人物からみて近いと感じられるのをコで指し示すのである。したがって、現場指示の拡張と見てよい」と述べ、自由間接話法に属するとの見方を示している。

しかしこのようなコは、テキスト的見方をするならば、(81)では先行文脈の「深代淳郎の走り書きのカード」と前方照応関係にあり、(82)の「この爺さん」は先行文脈の「隣の爺さん」をを指していると考えられる。つまり「これ」や「この爺さん」は、テキスト上では照応関係にある文脈指示で、登場人物にとっては現場指示であるという二重の性格を帯びている。このようなコの用法を扱うために、東郷 (2000)では「談話モデルの埋め込み」という分析を提案した。次の図がそれを表している。

- (83) 談話モデルの埋め込みと二次的発話状況領域の構築



<sup>22</sup> 「視点遊離のコ」は田窪・金水 (1996)の用語である。

<sup>23</sup> 正保 (1981)の例

<sup>24</sup> 田窪・金水 (1996)の例



この図の大きな枠内は物語を読む読者の心内に形成される談話モデルを表している。物語の言語情報はその中の言語文脈領域に入力され蓄積される。物語に登場人物がいるとき、その人物は物語内で自分の談話モデルを持つ。これが言語文脈領域に設定された小さな枠内の談話モデルである。これを埋め込まれた二次的談話モデルと呼ぶ。この二次的談話モデルの発話状況領域に登録されている a が、上の例の「これ」「この爺さん」が指すものの談話指示子である。このとき二次的談話モデルの発話状況領域は、登場人物が物語の中で活動している現場に相当する。談話指示子 a は登場人物にとっては（つまり二次的談話モデルでは）発話の場にあるものを指すので現場指示である。一方、読者にとっては（つまり大きな枠内の談話モデルでは）テキスト上の先行詞を指すので文脈指示である。このように談話モデルの埋め込みを想定すれば、「視点遊離のコ」が持つ二重の性格をうまく表現することができる。

存在文が持っている場所存在文（金水の用語では初出導入文）と眼前描写文の両義性も、この「視点遊離のコ」と同じように、談話モデルの埋め込みで説明することができる。

(84) *Xavier continua sa promenade solitaire dans le village. Il arriva à une petite place déserte. Il y avait une fontaine au milieu de la place.*

「グザヴィエは村の中を一人で散歩し続けた。彼は人気のない小さな広場に出た。広場の中央に噴水があった」

この例の存在文 *Il y avait une fontaine au milieu de la place*。「広場の中央に噴水があった」は、場所句を伴う場所存在文である。これを初出導入文と取るならば、この文は物語世界の中に噴水という新たな事物を導入している。これが図 (83)の大きな枠内の談話モデルによる解釈である。ところが (82)を登場人物グザヴィエの視点からの描写だと考えると、グザヴィエの目の前に展開した事態を描いているので、これは眼前描写文と取ることができる。これは図(83)の小さな枠内に埋め込まれた二次的談話モデルによる解釈である。このように存在文が本質的に抱えている解釈の両義性は、大きな談話モデルの中に二次的談話モデルが埋め込まれ、存在文はその両方で解釈可能だと見なすことで説明できる。

ここで事物の存在レベルが異なることにも注意しておこう。「噴水」は大きな談話モデルの中では個体レベルの存在であり、二次的談話モデルでは局面レベルである<sup>25</sup>。

また日本語ではどちらの談話モデルを発動させるかを示す手段があることにも注意しておこう。

(85) a. *グザヴィエは村の中を一人で散歩し続けた。彼は人気のない小さな広場に出た。広*

<sup>25</sup> ここでは論じないが、筆者はテキスト内での照応関係は個体レベルの談話指示子の間にしか成り立たず、局面レベルの談話指示子の間には照応関係を設定できないと考えているので、この区別は重要である。

場の中央に噴水があった。

- b. グザヴィエは村の中を一人で散歩し続けた。彼は人気のない小さな広場に出た。広場の中央に噴水がある。

日本語では過去の物語でも、b.のように動詞の非過去形の「ル形」を使うことができる。過去形の「タ形」を用いた a.よりも、「ル形」を用いた b.の方が、登場人物のグザヴィエの視点から見た事態というニュアンスが強い。グザヴィエにとって噴水の見撃は現在の事柄であり、この「ル形」は一種の自由間接話法である。日本語では「ル形」を用いることで埋め込まれた二次的談話モデルを用いた解釈を優先させることができるのである。

## 7. 存在文の本質的両義性

存在文が小説の冒頭などで用いられ、談話世界が物語世界であることが聞き手にもはっきりしているときは初出導入文としての性格が際立つ。また上の例(84)でも新たな事物を物語に導入していることは疑いない。しかし物語ではなく日常の談話で用いられる存在文はどうだろうか。まず次の例から検討しよう。

- (86) A : Ah, je commence à avoir faim. Qu'est-ce qu'il y a dans le frigo ?

「ああ、おなかがすいてきた。冷蔵庫に何がある?」

B : [冷蔵庫の中を見て]

Il y a du jambon et un morceau de fromage. C'est tout.

「ハムとチーズが一切れある。それだけだよ」

B は冷蔵庫の中を覗きながら発話しているので、眼前描写文と見なすことができそうに見える。また物語ではないが、談話にハムとチーズという新しい事物を導入しているという点で、金水の言う初出導入文とすることもできるように見える。しかし、実はこの文にはもうひとつの解釈の可能性もある。次の例を見てみよう。

- (87) A : Qu'est-ce qu'il y a dans ce sac ?

「このカバンには何が入っているんだい」

B : Eh bien, il y a mon portable, mon porte-monnaie et des Kleenex, c'est tout.

「えっとね、僕の携帯と小銭入れとティッシュが入っている。それだけだよ」

自分のかばんだから入っているものをあらかじめ知っているのが当然で、B の文はカバンの中を覗かなくても発話できる。だから眼前描写文である必要はない。この文に生じている名詞句 *mon portable* と *mon porte-monnaie* は定名詞句である。眼前描写文では定性制約は

解除されるので、定名詞句が生じていても不思議ではない。しかしこれを眼前描写文ではないとすると、このことはとたんに問題となる。場所存在文（初出導入文）には定性制約があるためである。とするとこの文は眼前描写文でも初出導入文でもないことになってしまう。

(87)B は実はリスト存在文と見なすべきというのが本稿の考えである。Ward & Birner (1995)が論じているように、リスト存在文とは先行文脈などで形成された open proposition の変数を列挙する働きがある。次がリスト文の典型的な例である。

(88) A : Qu'est-ce qu'il y a à voir dans cette ville ?

「この町で見るべきものは何がありますか」

B : Il y a l'Hôtel de Ville et le Jardin botanique. C'est tout.

「市役所と植物園があります。それで全部です」

A の発話により [x est à voir dans cette ville] (x がこの町で見るべきものである) という open proposition が形成され、B の返答は変数 x に該当するものを列挙している。「市役所」と「植物園」には定冠詞が付いており既知の事物を表すが、それらが open proposition の変数 x の値となることが新情報であるため定性制約を受けない。リスト存在文はこのように、先行文脈で open proposition が作られていることが必要条件であるため、談話冒頭でいきなりリスト存在文が用いられることはない。また変数 x に該当する値をすべて挙げるよう要請されることが多いため<sup>26</sup>、(88)B のように最後に C'est tout. 「それで全部です」を置くことがよくある。(87)ではカバンの中に入っているものを列挙するように求められているので、答えの文はリスト存在文である。

このことを念頭に置いてもう一度 (86) を見ると、当初、場所存在文か眼前描写文と見えた (86)B も、実はリスト存在文であることがわかる。この例においても冷蔵庫に入っているものをたずねる (86)A によって、[x est dans le frigo] (x が冷蔵庫に入っているものである) という open proposition が形成され、(86)B はその答えとなっているからである。(86)B には場所句はないが、dans le frigo であることは文脈上自明である。しかし場所句を加えた日本語訳としては、場所存在文の訳である「冷蔵庫にハムとチーズが一切れある」ではなく、場所句を主題化した「冷蔵庫にはハムとチーズが一切れある」のほうがふさわしいことにも留意しておこう<sup>27</sup>。

例文を少し手直ししてみる。

<sup>26</sup> リスト文に網羅性 (exhaustivity)が要求されるかどうかという点については意見が分かれている。これは焦点 (focus)の網羅性と関係するが、ここでは論じない。

<sup>27</sup> この意味では open proposition も場所句を前置して [dans le frigo est x] とするほうがより適切かもしれない

(89) a. Tiens ! Il y a du jambon et un morceau de fromage dans le frigo.

「あれ！ 冷蔵庫にハムとチーズが一切れあるよ」

b. Il y a du jambon et un morceau de fromage dans le frigo. Kevin prend le jambon pour faire un sandwich.

「冷蔵庫にハムとチーズが一切れある。ケ빈はサンドイッチを作るためハムを取り出す」

同じ存在文でも a.のようにすれば、眼前描写文の解釈が優勢になる。また現在時制ではやや不自然だが、芝居のト書きの一部と仮定すれば、b.は場所存在文の初出導入文と見なすことができる。このように存在文は本質的に多義的なものであり、文脈依存性の高い文型なのである。

ではこの文脈依存性はどのような性質のものなのか。意味解釈を分ける鍵は、存在文が談話モデルのどの領域を探索領域とするかである。すでに述べたように、発話状況領域を探索領域とすると眼前描写文になる。また言語文脈領域を探索領域として、その中に構築された談話世界に新しい事物を導入すると見なされると初出導入文になる。また先行文脈が *open proposition* を形成しているとリスト存在文になる。ちなみにリスト存在文の探索領域は共有知識領域である。(88)を見てわかるように、「この町で見るべき観光名所」を列挙するように求める質問の答えがリスト存在文であり、その候補は答える話し手の長期記憶が保存されている共有知識領域と見なすのが適切である<sup>28</sup>。

関係する存在文の類型と探索領域を一覧表にすると次のようになる。

存在文の類型	探索領域	事物の存在レベル
眼前描写文	発話状況領域	局面 (stage)
初出導入文	言語文脈領域	個体 (object)
リスト存在文	共有知識領域	個体 (object) / 類 (kind)

このように存在文の意味解釈が文脈依存的であるのは、最終的には談話モデル内での探索領域の違いであると見なすことができる。

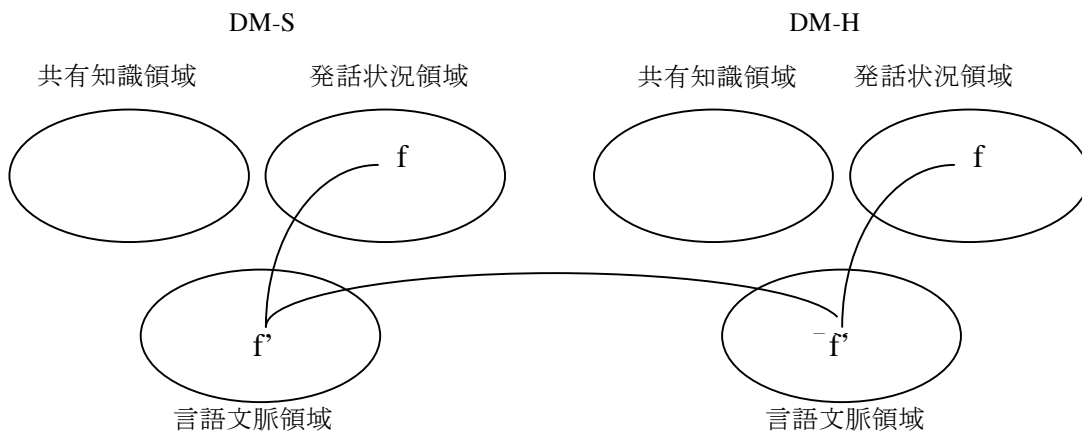
これを談話モデルを用いて表示してみよう。

<sup>28</sup> *Qui est-ce qui voudrait bien m'aimer ? – Il y a moi.* 「私を愛してくれる人がいるだろうか」「僕がいるよ」では話し手を表す記号である *moi* が変数 *x* なので、探索領域は発話状況領域ではないかと思われるかもしれないがそうではない。この場合も探索領域は共有知識領域である。

・眼前描写文<sup>29</sup>

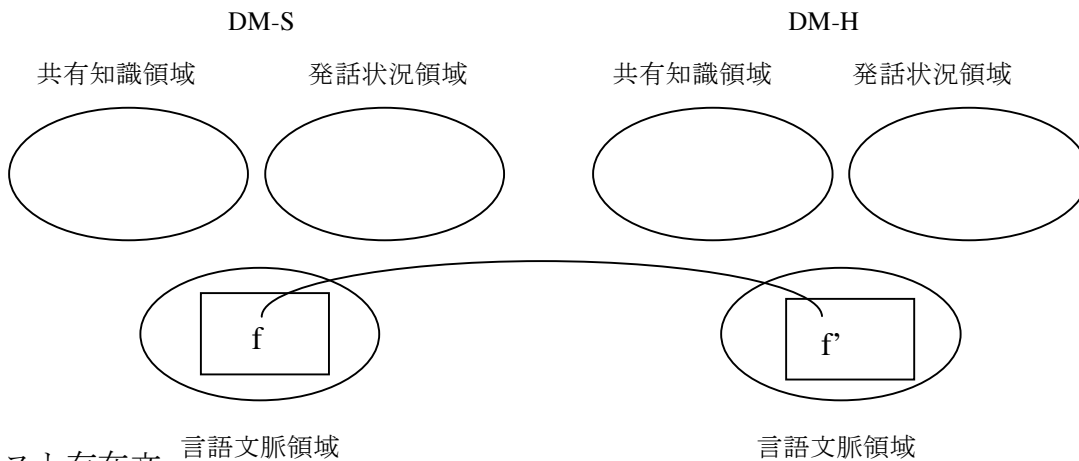
Tiens ! Il y a un morceau de fromage dans le frigo.

「あれ! 冷蔵庫にチーズが一切れあるよ」



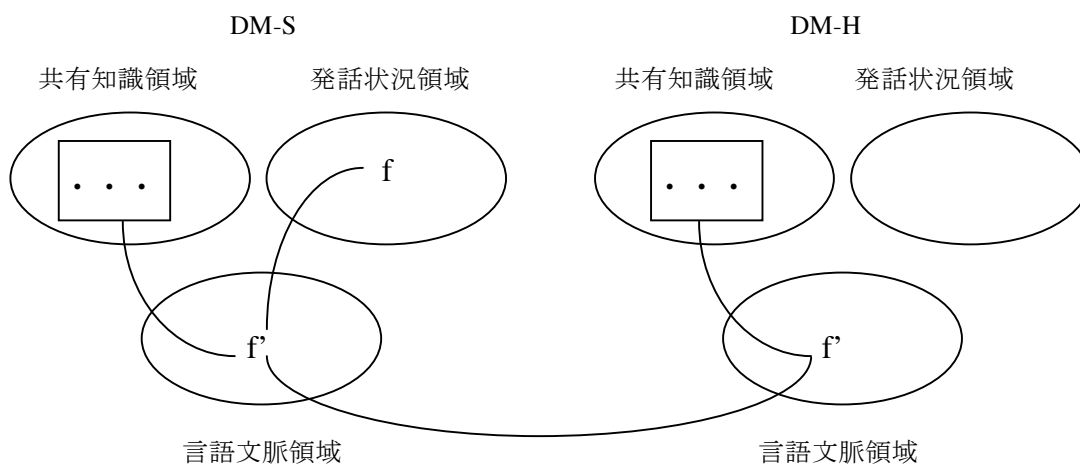
・初出導入文

Il y a un morceau de fromage dans le frigo. (Kevin le prend.)



・リスト存在文

(Qu'est-ce qu'il y a dans le frigo ?) Il y a un morceau de fromage.



<sup>29</sup> この眼前描写文では、共有知識領域に登録されている類レベルの「チーズ」があり、そこから発話状況領域にある局面レベルのチーズを切り出す関数があると想定されるが、本稿ではその詳細までは考えていないので図示していない。

本稿ではリスト存在文の探索領域は共有知識領域であると仮定した。質問文脈「冷蔵庫の中に何がある?」によって、[x est dans le frigo] という open proposition が共有知識領域に形成される。図で四角の中に点が三つ描かれているのがそれである。Il y a un morceau de fromage.と答えた話し手の DM-S の発話状況領域にある f は、話し手が冷蔵庫を探して見つけたチーズである。しかし、[x est dans le frigo] という open proposition の変数 x に代入されるのはこの f ではなく、言語文脈領域に登録された f' であることに注意したい。

さらに微妙な例を見てみよう。

(90) Léa : Ah !... Oui, c'est beau !

「ええ、何てきれいなもの」

Blanche : Oui... Et puis, au fond il y a les tours de La Défense, et puis derrière, la tour Eiffel !

「ええ、それから遠くにはデファンス地区の高層ビルがあるし、その後ろにはエッフェル塔があるのよ」

(E.Rohmer, *L'ami de mon ami*)

高層マンションの住人の Blanche が訪ねて来た友人の Léa にマンションからの眺望を見せながら説明している発話である。もしこれが初めてこの眺望を見る Léa の発話なら次のようになるだろう。

(91) Oh, que c'est beau ! Il y a les tours de La Défense, et puis derrière, la tour Eiffel !

「ええ、何てきれいなもの。遠くにはデファンス地区の高層ビルがあるし、その後ろにはエッフェル塔があるわ !」

これなら自分の目で見たものを発見の驚きとともにその場で述べており、明らかに眼前描写文である。しかし(90)の Blanche はマンションの住人であり、自分の家だから眺望のことはよく承知している。だから「自分のマンションから見えるもののなかには、デファンス地区の高層ビルとエッフェル塔がある」ということは、Blanche の共有知識領域に登録済みである。Blanche はこの科白を窓の外を見ずに、後ろを向いてコーヒーの支度をしながらでも発話できる。(90)は自分の高層マンションから何が見えるかを列挙しつつ説明していると考えられるので、リスト存在文と見なすのが適切である。

「昔々あるところに…」のように物語スペースが開かれることがはっきりしている場合、場所存在文は金水の言う初出導入文としての性格を帯びる。しかし日常会話で物語スペースを開かないときはどう考えるべきだろうか。

(92) Si tu as faim, il y a des bananes sur la table.

「おかかかすいているんだったらテーブルの上にバナナがあるよ」

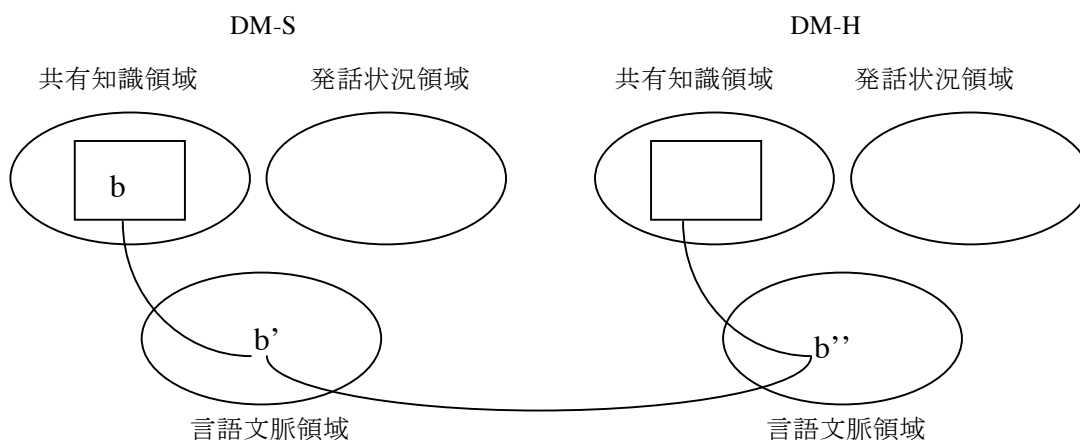
学校から帰宅した子供に向けた母親の発話だとしよう。物語スペースが開かれているとは考えにくい。バナナの載ったテーブルは隣の台所にあってもかまわないので、眼前描写文でもない。open proposition を形成する「テーブルの上に何があるか」という質問文脈もないので、リスト存在文とも見なせない。金水の存在文の分類には、このタイプの文を納める場所がないのである。

本稿では次のように考えたい。(92)のタイプの場所存在文は「聞き手の世界知識の更新」を目的とする文で、探索領域は共有知識領域、事物の存在レベルは個体 (object)である。「聞き手の世界知識」とは、大は国際情勢から小は自宅の狭い台所の様子に至るまで、そのスケールの違いはあるが、要するに「聞き手が世界について持っている知識」をさす。この知識は共有知識領域の中の百科事典的知識領域（もっぱら世界に関する知識）とエピソード記憶領域（もっぱら個人的知識）に格納されている。(92)の発話は聞き手である子供が自宅の様子について持っている知識に「バナナがある」という事実を付加して談話モデルを更新するよう求める発話と考えることができる。

もちろんこの場合でも、des bananes の談話指示子は聞き手の言語文脈領域に登録される<sup>30</sup>。しかし物語の場合の初出導入文とは異なり、言語文脈領域が探索領域なのではない。言語文脈領域と共有知識領域とを同期させることにより、聞き手の共有知識領域を更新することが目的の文である。物語の初出導入文は言語文脈領域が探索領域であり、共有知識領域の更新を聞き手に求めることがない。この点が大きなちがいである。

談話モデルで図示してみよう。

Il y a des bananes sur la table. 「テーブルの上にバナナがあるよ」



<sup>30</sup> すべての発話の言語情報は言語文脈領域に登録されるので、これは当然のことである。

話し手の共有知識領域の中の四角は、世界知識の部分集合である「自宅の様子」に関する知識領域を表す。存在文の話し手の知識領域にはバナナに対応する談話指示子は登録済みである (= 話し手はテーブルの上にバナナがあることを知っている)。話し手は「テーブルの上にバナナがあるよ」という発話で、言語文脈領域にバナナの談話指示子 b' を登録する。これは直ちに DM-H の言語文脈領域にコピーされる。聞き手は今聞いたばかりの情報を自分の共有知識領域に転送して、自分が持っている自宅の様子に関する知識領域を最新の状態に更新する。上の図にはそこまで描かなかったが、この後 b'' は DM-H の共有知識領域に転送され、四角の中で b''' となる。

この場合、探索領域は共有知識領域で事物の存在レベルは個体レベルであるので、リスト存在文の特徴と共通している。リスト文との唯一の相違は、「テーブルの上に何がありますか」のような質問文脈によって open proposition が形成されていないという点である。

もっとも判断の微妙な例もないではない。

(93) [泥棒がこれから押し入る家の様子を相棒に説明している]

On monte au premier étage. Au fond du couloir, il y a deux chambres. Dans la première chambre, il y a une grande armoire en acajou. Le coffre-fort est caché dans cette armoire.

「二階に上るんだ。廊下の突き当たり寝室がふたつある。手前の寝室の中に大きなマホガニーのたんすがある。金庫はこのたんすの中に隠されている」

これを物語の一節と見なせば初出導入文と取れなくもない。しかしここでは存在文の果たす談話的役割がちがう。この例で存在文は、聞き手である相棒がこれから押し入る家について持っている知識を更新することで、聞き手の共有知識領域を豊かにすることを役割としていると見なすべきである。

それでは(92)のタイプの場所存在文（西山の場所・存在文、以下「バナナ文」と呼ぶ）を金水の初出導入文とは別の類型として区別すべきだろうか。本稿ではバナナ文の探索領域は共有知識領域で、初出導入文の探索領域は言語文脈領域だとしたので、探索領域が異なることから別の類型として区別すべきだと考えられるかもしれない。しかし本稿では今のところその区別は不要だと考えている。本稿の分類による（広義の）場所存在文には、バナナ文（狭義の場所存在文）と初出導入文の両方が含まれると考えるほうが現実的である。バナナ文（狭義の場所存在文）が対象とする「世界の知識」と初出導入文が対象とする「物語の知識」とは、究極的には区別できないと考えるからである。試しに次の例を見てみよう。

- (94) a. イタリアのサン・ジェミニアーノには高い塔がたくさんあります。  
b. ナウシカの暮らす風の谷には高い塔がたくさんありました。



a. は観光ガイドブックにも書いてある事実で世界の知識の一角を構成する。一方 b. は宮崎駿のアニメ『風の谷のナウシカ』というフィクションの一節だから、こちらは虚構の物語である。しかしこのふたつは究極的には区別できない。その理由を問うと、われわれは哲学的考察に足を踏み入れることになるだろう。なぜなら世界はひとつの物語であり、物語もまたひとつの世界だからである。

このことはかんたんな思考実験を試みればすぐわかる。マダガスカル沖のモーリシャス諸島にかつて棲息していたドードー鳥という種がある。ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』にも登場する。この鳥は乱獲のために 17 世紀に絶滅した。さてこのドードー鳥が絶滅せずにまだモーリシャス諸島に棲息しているという一点を除いて、残りは現実世界とまったく同じ物語を作ったとする。しかも作者の作為により、ドードー鳥がまだ生きているということは、物語の最後にやっと明かされるとしておこう。この物語を読まされる読者は、自分が読んでいるものが「世界の知識」なのか「物語の知識」なのか区別できないだろう。したがってその物語に出現する存在文が、読者に世界の知識の更新を求めるバナナ文（狭義の場所存在文）なのか、それとも物語に事物を導入する初出導入文なのかを区別することができない。

最後に本稿で検討した存在文の類型と、それらを区別する根拠となる特徴をまとめておこう。典型的な例も添えておく。

	探索領域	存在レベル	open proposition の有無
・ 場所存在文（広義）			
初出導入文	言語文脈領域	個体 (object)	無
場所存在文（狭義）	共有知識領域	個体 (object)	無
・ リスト存在文	共有知識領域	個体 (object) / 類 (kind)	有
・ 眼前描写文	発話状況領域	局面 (stage)	無
・ 部分集合文	共有知識領域	個体 (object) / 下位類 (sub-kind)	無

### 【典型例】

- ・ 初出導入文

Il était une fois en Espagne un sorcier méchant.

「昔々スペインに意地の悪い魔法使いがおりました」

- ・ 場所存在文（狭義） = バナナ文

Si tu as faim, il y a des bananes sur la table.

「おなか为空いているなら、テーブルの上にバナナがあるよ」

- ・ リスト存在文

Qu'est-ce qu'il y a dans le frigo ? — Il y a du lait et des œufs.

「冷蔵庫の中に何がありますか」「牛乳と卵があります」

・眼前描写文

Regarde ! Il y a le Père Noël dans le jardin !

「見て！庭にサンタクロースがいるよ！」

・部分集合文

Il y a trois élèves qui sont absents aujourd'hui.

「今日欠席している生徒が三人いる」

## 8. おわりに

最後に残された問題について手短かに触れておこう。

フランス語学の世界では *il y a* 構文は英語の *there* 構文ほど盛んに研究されていない。このためいまだ詳しく論じられていない問題が残っている。特に実主語にかかる定性制約はほとんど話題にされていない。例えば朝倉 (1981) では次のように述べられている。

(95) 「何があるかが問題になっているのだから、存在するものはまだ知られていない不特定なもので、不定冠詞・部分冠詞・基数形容詞・不定形容詞・数量副詞などを限定辞とするのが普通である。(…) しかし、ある場所に存在するものが何かを言い表すとき、その何かが既知のものであることもかなりある。

a. Au bout de la digue, il y avait le phare.

「堤防の突端に灯台があった」

b. Elle s'assit à la droite de Françoise. A gauche, il y avait Xavière.

「彼女はフランソワーズの右隣に腰掛けた。左にはグザヴィエールがいた」

c. Dans la maison, il y avait la veste d'Anne, ses fleurs, sa chambre, son parfum.

「家の中にはアンヌの上着と彼女の花と彼女の寝室と彼女の香りがあった」

d. Dans le lit de Clémentine, il y avait Clémentine et les trois bébés.]

「クレマンティーヌのベッドの中にはクレマンティーヌと三人の赤ん坊がいた」

(朝倉 1981 : 228)

朝倉はこのように述べるに留まり、残念ながら既知の物の存在を述べるのがなぜ冗長にならないかを説明していない。これは前章で述べた場所存在文の本質的両義性によって説明することができる。初出導入文は談話世界に新規の指示対象を導入するものであるが、談話世界に視点が設定されると眼前描写文としても働き、二重の機能を果たすことになる。このため本来ならば既知・既出のものを表す定名詞句が存在文に生じることができるのである。ちなみに朝倉があげている例は全部が物語で視点を担う登場人物がおり、またすべての例で場所句が前置されていることも興味深い。場所句の前置と存在文の解釈には深い

関係があるが、本稿ではこれ以上展開することができなかった。東郷 (2005)を参照されたい。

他にも残された課題は多い。部分集合文には部分集合を形成するために関係節が必要であるが、関係節があるからといってすべてが部分集合文になるわけではない。関係節の存在は部分集合文の必要条件であるが十分条件ではない。次の文は関係節があるが部分集合文ではなく、初出導入文としての場所存在文である。どのような要因が部分集合文と初出導入文の解釈を分けるのかは、十分に明らかになったとは言えない。

(96) a. Les agents de polices arrivèrent sur les lieux de l'accident. Il y avait des rescapés qui saignaient de partout.

「警官たちは事故現場に到着した。体中から血を流しているけが人がいた」

b. Monsieur le Président. Il y a des journalistes qui attendent votre conférence de presse dehors.

「大統領閣下。外に閣下の記者会見を待つ新聞記者たちがおります」

また部分集合文には場所句を付けることが一般に難しいとしたが、次の例は可能である。

(97) a. Il y a des reptiles qui sont parthénogénétiques en France.

「フランスには単為生殖する爬虫類がいる」

b. Il y a deux reptiles qui sont parthénogénétiques dans ce zoo.

「この動物園には単為生殖する爬虫類がいる」

c. Il y a deux reptiles qui sont parthénogénétiques chez moi.

「うちの家には単為生殖する爬虫類がいる」

a.では下位類 (sub-kind) 読みが優勢で、「それはカマルグオオトカゲとコルシカヤモリだ」と続けることができる<sup>31</sup>。すでに述べたように、このとき場所句 en France は制限節に繰り込まれる。次の式で下位類 (sub-kind)の存在レベルは類 (kind)レベルと同じとみなしておく。

$\exists x^k [\text{reptile}(x^k) \wedge \text{en-France}(x^k)] [\text{être-parthénogénétique}(x^k)]$

これは「フランスに生息する爬虫類のなかには、単為生殖するものがある」という意味になり、三分構造で書くことのできる部分集合文である。このとき場所句 en France は「爬虫類」(reptiles)の集合を制限している。したがってこの場所句 en France は、場所存在文 II

<sup>31</sup> 「カマルグオオトカゲ」も「コルシカヤモリ」も適当に考えた動物名で実在するものではない。

y a un vase sur la table. 「テーブルの上に花瓶がある」の場所句 sur la table のように事物のありかを述べる場所句ではない。

ところが b. のように場所句を dans ce zoo 「この動物園に」に変えると、a.と同じ下位類 (sub-kind) 読みと並んで、個体 (object)読みも可能になる。また c.のように chez moi 「うち之家に」とすると個体読みが断然優勢となる。個体読みでは「うちには単為生殖をする爬虫類の個体が2匹いる」で、「それは(カマルグオオトカゲの) 健太と花子だ」と続くと思われる。この読みは次のように表示できる<sup>32</sup>。

$$\exists x^0 [ R(x^0, \text{reptile}^k) \wedge \text{\textasciitilde} \text{etre-parthénogénétique}(x^0) \wedge \text{chez-moi}(x^0) ]$$

これは三分構造ではなく、したがって部分集合文ではない。場所存在文である。そして場所句 chez moi 「うち之家に」は上の en France とは異なり、事物のありかを述べる場所句である。

何がこのように下位類 (sub-kind) 読みと個体 (object) 読みを分けるのか、現時点では明らかでない。「この世に」「ヨーロッパに」のように空間的・地理的に大きなスケールの場所句では下位類読みが優勢になり、「うち之家に」「町内に」のように小さなスケールの場所句では個体読みが優勢になることは容易に推測できる。では中間的な「京都市に」とか「左京区に」ではどうなるのだろうか。下位類読みから個体読みへと徐々に移行するグラデーションをなしているのか、それともどこかに境界線があるのか。今後の課題である。

#### 【参考文献】

- 朝倉季雄(1981)『フランス文法ノート』白水社。
- 金水敏 (1982) 「人を主語とする存在表現 — 天草版平家物語を中心に」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会) 59-12, 58-73.
- 金水敏 (2002) 「存在表現の構造と意味」近代語学会編『近代語研究』11、473-493.
- 金水敏 (2006) 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 定延利之 (2004) 「ムードの『た』の過去性」、『国際文化研究』(神戸大学国際文化学部紀要)21号, 1-68.
- 正保 勇(1981) 「コソアの体系」『日本語の指示詞』(日本語教育指導参考書 8)、国立国語研究所, 51-122.
- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」、田窪行則編『日本語のモダリティ』、くろしお出版。
- 田窪行則、金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」、『認知科学』 3-3、85-116.

<sup>32</sup> この読みでは「爬虫類に属する個体」が問題になっており、下位類の「カマルグオオトカゲ」は関与的ではない。実現関数は  $R(x^0, y^k)$  となり、類から個体を切り出す関数になっている。これは Carlson の想定していない関数であるが、その必要性は十分に想定できる。

- 東郷雄二 (1994) 「メタ形式としての『～とは』とフランス語の属詞を問う疑問文」(未公開原稿 <http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/metaform.html>)
- 東郷雄二 (1998) 「談話モデルと指示」『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』科学研究費成果報告書、pp.34-57.
- 東郷雄二 (1999) 「談話モデルと指示 - 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」、『京都大学総合人間学部紀要』第6巻、pp.35-46.
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」、『京都大学総合人間学部紀要』第7巻、pp.27-46.
- 東郷雄二 (2001) 「定名詞句の「現場指示的用法」について」、『京都大学総合人間学部紀要』第8巻、pp.1-17.
- 東郷雄二 (2002) 「不定名詞句の指示と談話モデル」、『談話処理における照応過程の研究』科学研究費成果報告書、pp.1-35.
- 東郷雄二 (2005) 「談話の構築と領域」、『フランス語学の現在 - 木下教授喜寿記念論文集』、白水社、55-74.
- 東郷雄二 (近刊) 「存在文と不定名詞句の意味解釈」
- 西山佑司 (1994) 「日本語の存在文と変項名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』26, 115-148.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』ひつじ書房
- 藤村逸子 (1993) 「わからないコトバ、わからないモノ - 『って』の用法をめぐって」、『名古屋大学言語文化部言語文化論集』XIV-2, 45-56.
- 古川直世 (1996) 「Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.型構文について」『フランス語学研究』30号, 34-35.
- Carlson, Gregory, N. (1977) *Reference to Kinds in English*, Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst, reproduced by Garland.
- Carlson, Gregory, N., Pelletier, Francis, J. (eds) (1995) *The Generic Book*, The University of Chicago Press.
- Hajicová, E., Partee, B.H., Sgall, P. (1998) *Topic-Focus Articulation, Tripartite Structures, and Semantic Content*, Kluwer Academic Publishers.
- Heim, Irene, R. (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge.
- Kleiber, George (1981) “Relatives spécifiantes et relatives non spécifiantes”, *Le Français moderne* 49, 216-233.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*, The University of Chicago Press, 『認知意味論紀』伊国屋書店、1993.
- Lumsden, Michael (1988) *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*. Routledge.

- Prince, Ellen, F. (1992) "The ZPG letter : Subjects, Definiteness, and Information- status", William C. Mann & Sandra A. Thompson (eds) *Discourse Description. Diverse Linguistic Analyses of a Fund-Rising Text*, J.Benamins, 295-326.
- Rando, Emily & Donna Jo Napoli (1978) "Definites in There-sentences", *Language* 54-2, 300-313.
- Ward, Gregory. & Betty, J.Birner (1995) "Definiteness and the English existential", *Language* 71-4.